

## 東広島市長者スクモ塚第2号古墳発掘調査報告 (第2～4次調査)

野島 永・永野 智朗

### 1. はじめに

長者スクモ塚古墳群は広島県東広島市西条町御菌宇にある。本古墳群は戦後まもなく、すでにその存在が知られていたようで、箱形石棺が露出していたらしい。近隣の子供たちの遊び場となり、埴輪片で遊んだという。1970年には、広島大学文学部考古学講座の助手であった川越哲志が中心となり、長者スクモ塚第1号古墳の測量調査を行った。当時、長者スクモ塚古墳群のある丘陵南西を削平して広島大学西条共同研修センター・西条総合運動場が建設されることとなったが、考古学講座の教員であった松崎壽和や潮見浩らの指摘もあって、当古墳群が破壊から免れたようである<sup>(1)</sup>。直径40mの円墳に造出し（前方部）をもつ帆立貝形古墳と認識されていたことから、造出しの前面まで、丘陵の削平範囲が縮小された。このため、長者スクモ塚第1号古墳の前方部前面側には丘陵削平にともなってコンクリートの擁壁が施工されることとなった（図版第1a）。

これまでの知見は『広島県史』（松崎 1979d）や『前方後円墳集成』（古瀬 1991）などにおいて示されたが、墳丘測量図や出土遺物などの詳細な情報については報告されてはいなかった。帆立貝形古墳とみなされていた長者スクモ塚第1号古墳は、広島県三次市にある酒屋高塚古墳（青山・小都・伊藤 1983）など、備北地域の帆立貝形古墳との形態的類似性が想定され、古墳時代中期後半に位置づけられると理解された場合も少なくはなかった。その後、広島大学考古学研究室では1996年にも当古墳群の測量調査を行った。

近年、広島大学考古学研究室では三次・庄原地域における帆立貝形古墳の測量調査とその報告を行ってきた（村田ほか2014、平尾ほか2015、池西ほか2016）。このため、2016年には3度目の長者スクモ塚古墳群の測量調査〔第1号古墳〈長者スクモ塚古墳群第1次調査（下江・永野・藤澤 2018）〉、第2号古墳〈同第2次調査（永野 2018）〉〕を実施し、長者スクモ塚第1号古墳が備北地域とは異なる形態をもつ帆立貝形古墳であることを指摘した。また、表採した埴輪片から、古墳時代中期の三ツ城第1号古墳の築造以前に遡る様相を示すものと想定することになった。

そして、当古墳群に関する既往の調査成果を整理し、墳丘規模や埋葬施設を明らかにすることを目的に、広島大学文学部考古学専攻の実習授業（野外考古学実習A・B・C）として当古墳群の測量調査（第1・2次調査）に引き続き、第2次調査から一部併行して発掘調査を開始した<sup>(2)</sup>。本稿では、長者スクモ塚第2号古墳の発掘調査の経緯とその成果についてまとめておきたい。

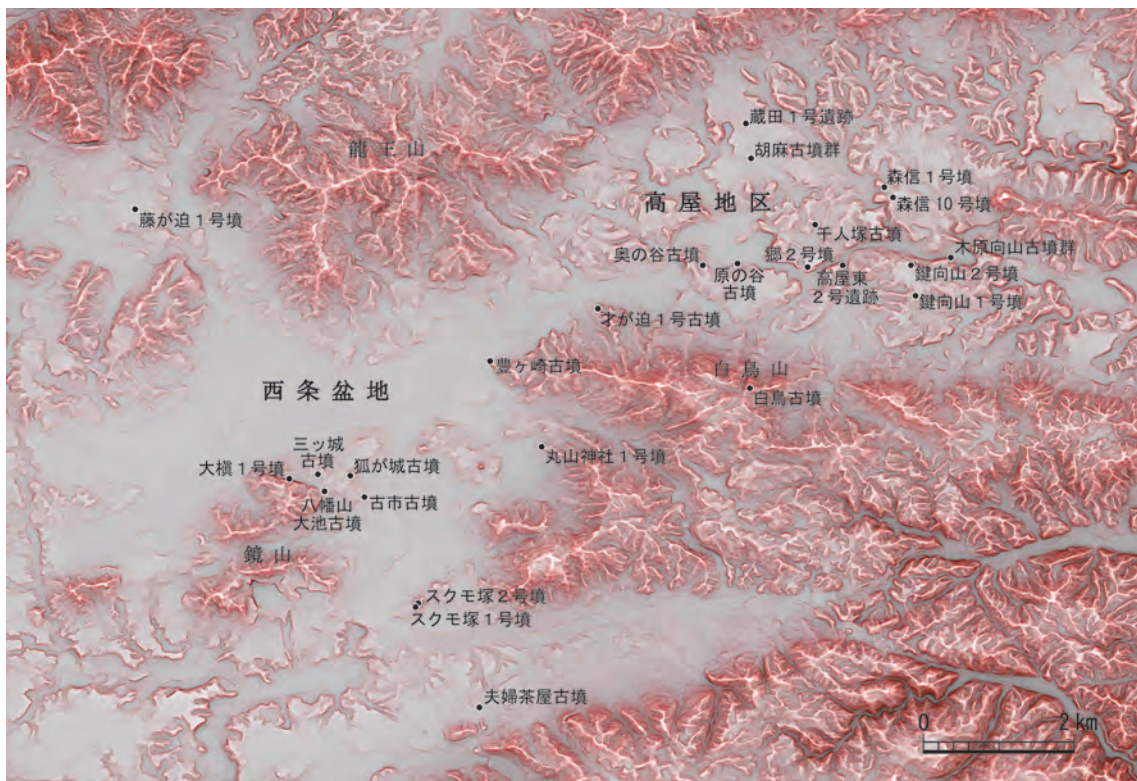
（野島）

## 2. 長者スクモ塚第2号古墳に関わる知見

### (1) 周辺古墳の埋葬施設（第1図）

西条盆地とその周辺では、とくに高屋地区において古墳や墓域の検出が多い。これは広島大学の西条盆地（鏡山西隣）への移転や、高屋地区における東広島ニュータウン建設による宅地開発、道路整備にともない発見されたことに起因する。赤色立体地図（第1図）をみても高屋地区では、宅地造成のための山塊削平が広範囲に及んでいることがわかる。西条盆地西・南部ではいまだ知られてはいない古墳が遺存している可能性も多々あり、現在の分布状況がそのまま当時の古墳造営状況を示すものではないものの、現状で知りうる調査事例を概観しておきたい。

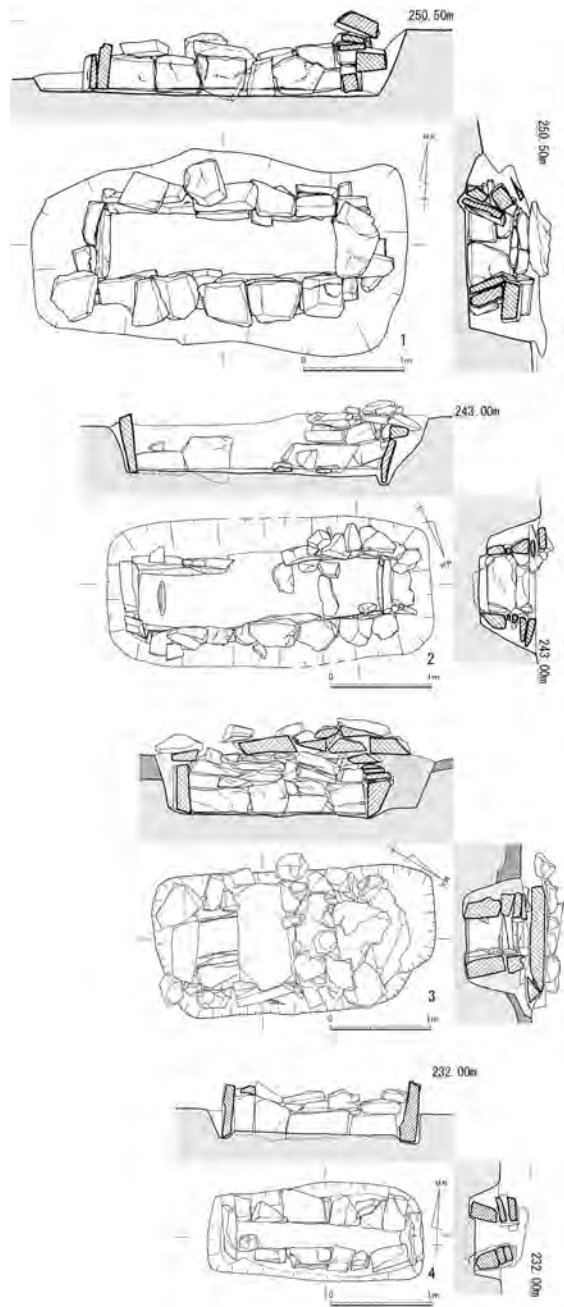
まず、古墳時代前期には高屋町（第1図、高屋地区）に小規模な古墳が築造される。高屋町才が迫第1号古墳は東西11.2m、南北9.5mの方形墳であり、出土土器から古墳時代初頭から前葉に位置づけられている（大上 1993）。墳頂部分には東西方向に並列して配置された2基の竪穴式石室が遺存していた。両者の規模についてはそれほど変わらなかったが、石材の積み方が異なっていた。第1主体部は控え積みのない簡略化した竪穴式石室で、割石材を積み上げて壁体を構築している。それに対して、第2主体部は板石材を立てて側石とし、その周りにさらに一枚の板石材を立て巡らせていた。そして、その上に小型の割石材を水平に積み上げて壁体上部としていた（第2図1）。箱形石棺のように板石材を立て並べて壁体下部を作り、その上に割石材を水平に積み上げて壁体上部をなす箱形石棺系の小竪穴式石室で



第1図 西条盆地周辺の前半期の古墳分布（1/100,000 赤色立体地図 ©アジア航測株式会社〈5132〉）

ある<sup>(3)</sup>。壁体下部の石材が内側に傾斜して遺存していたことから、木棺が埋置されていたと想定される（大上 1993）。木棺は内法長2.1m、内法幅0.6mほどと想定されており、棺内から槍先・剣・袋状鉄斧・鑿などが出土した。同じく、高屋町原の谷古墳は墳丘長23.5mの墳丘で、わずかに竪穴式石室の基底部分と粘土床の一部が検出された。才が迫第1号古墳につづく古墳時代前期前半の築造とされる（出野上 2003）。このほか西条盆地の北西、飯田盆地にあった藤が迫第1号古墳も内法の長さ3.1m、幅0.8mとなる竪穴式石室をもつ。残念ながら遺存状況が悪く、基底部分の割石材、礫敷きの棺底面の一部が確認されたのみであった（河瀬 1971）。表土に散乱した鉄片以外、明らかな出土遺物がみられないが、古墳時代前期となる可能性が高い（藤野 2015）。西条町白鳥古墳は墳丘規模や埋葬施設などは明らかではないものの、仿製三角縁神獣鏡の出土が伝えられており、前期後半に位置づけられる（松崎 1979a、古瀬 1991）。

前期も終わりがちになると、西条盆地でも古墳が築造される。西条町丸山神社第1号古墳は墳丘長42.9m、前方部短小型の前方後円墳であり、出土した壺形埴輪から前期末葉頃の築造とされる（藤野 2015）。高屋町千人塚古墳は墳丘径約24.0mの円墳で、墳頂上に箱形石棺2基をもつ。現在は遺失したが、珠文鏡や碧玉製石釧の出土が知られており、それらの遺物から前期末葉頃に遡ると指摘された（古瀬編 2010）。また、今回概要報告を行う長者スクモ塚第2号古墳も箱形石棺を中心的な埋葬施設としていた。この段階以降になると、20m級以上の墳丘をもつ古墳の中心埋葬施設に箱形石棺を採用する事例が増える。西条町の狐が城跡弥生墳墓群（植田編 1983）や鍵向山石棺墓群（河瀬編 1975）、高屋町の浄福寺2号遺跡（山田・佐々木ほか1993）、胡麻5号遺跡（青山・沢元編 1990）などでは、弥生時代後期以降、箱形石棺墓が急激に増加する。木棺墓や石蓋土壙墓を凌駕しつつ古墳時代前期に継続するが（胡麻4・5号遺



第2図 西条盆地周辺の石棺系小石室 (1/75)  
 (1. 才が迫古墳 (第2主体部) 2. 森信10号古墳  
 3. 豊ヶ崎古墳 4. 鍵向山2号古墳)

跡、青山・沢元編 1990)、その大部分が無墳丘の墓地であった。小・中規模の前期古墳の埋葬施設に、箱形石棺が採用され始めたことからすれば、古墳造営上の大きな変化を古墳時代前期後葉から末葉頃にみることができる。

古墳時代中期になると、西条町に墳丘長92mの前方後円墳、三ッ城第1号古墳が築造される。三ッ城第1号古墳は広島県下でも最大規模の前方後円墳であり、造出しから出土した須恵器や埴輪などによって中期前半に位置づけられている(石井・三枝編 2004、古瀬編 2010)。第1・2号埋葬施設は底石をもつ小型箱形石棺を石槨で覆い、周囲には割石材を配置する特異な形態を示していた(石井・三枝編 2004)。中国地方山間部、岡山県横見墳墓群9号墳第3主体部の石棺墓(下澤・友成 1977)などにも類似する。近隣では、西条町大槇第1号古墳(藤岡 1993)の埋葬施設にも棺床に底石を組み込んだ小型箱形石棺が採用されている。四角柱体に近い側石を組み合わせる。内法が極めて小さくなるもので、墓壙掘形の形状も含めて三ッ城第1号古墳の埋葬施設との共通点が多い<sup>(4)</sup>。三ッ城第1号古墳の造営後に築造されたものと考えられ、周溝内の土坑には中期中葉を前後する完形の土師器甕が置かれていた。高屋町郷第2号古墳(沖田編 2009)も箱形石棺を有する。ほぼ同時期の築造と考えられる。

三ッ城第1号古墳以降、しばらく有力墓の造営が途絶える。墳丘長約30mの前方後円墳である高屋町森信第1号古墳は、表採された遺物から、中期後葉頃の築造とされ(石井 1990)、後続する首長墓とみられている。この段階以降も西条町の夫婦茶屋古墳(松崎 1979c)、八幡山大池古墳(鍛冶編 1982)や、高屋町の胡麻古墳群(青山・沢元編 1990)、高屋東2号遺跡(植田編 2008)、木原向山古墳群(河瀬編 1975)、鍵向山古墳群(河瀬編 1975)、などといった小規模古墳はもっぱら箱形石棺を埋置しており、古墳時代後期まで存続する(蔵田1号遺跡(葉杖・三保ほか1994))<sup>(5)</sup>。

一方で、古墳時代当初にみられた石棺系の小竪穴式石室もその形態を簡略化させつつ、後期まで引き継がれる。西条町豊ヶ崎古墳(是光 1972)や、高屋町森信10号古墳(石井編 2000)、鍵向山第2号古墳(河瀬編 1975)などに類例がある(第2図2・3・4)。小型の施設については、割石小口積みの「小石室系石棺」とみられるものもある(第2図4)。

西条盆地およびその周辺となる高屋地区は弥生時代後期以降、箱形石棺を主流とした棺づくりを行ってきた。古墳時代初頭から小規模な竪穴式石室などが造営されつつも、前期後葉から末葉頃には20m級以上の墳丘をもつ古墳にも箱形石棺が埋置されるようになり、中・後期を通して引き続くことになる。

## (2) 古墳名称および過去の情報に関わる問題

長者スクモ塚古墳群の概要についてはいくつかの文献に記載がある。以前、永野智朗が指摘したように、第2号古墳についても関連文献に副葬品の記載があるものの、古墳の位置関係や名称などが錯綜しており、矛盾する情報が多い(永野 2018)。過去に第3号古墳のものとされた情報が、現在の第2号古墳のものとして伝わった部分があるようだが、第3号古墳(あるいは第2号古墳)が滅失し、副葬品が失われた<sup>(6)</sup> 現在では、これまでの誤った情報を

たすことは難しい。鈴木・池田両氏の人骨に関わる調査に際して、描かれた第3号古墳2号石棺のスケッチ図（鈴木・池田 1950、2頁）は現在の長者スクモ塚第2号古墳のそれとは明らかに異なる。また、第3号古墳第1号石棺から鉦や管玉が出土したことも間違いなさそうである（鈴木・池田 1950）。よって、第3号古墳第1号石棺から獣形鏡が共伴していたのであれば、第3号古墳の第1号石棺に、第2号古墳に遺存した箱形石棺（本稿のST01）の情報（石棺内法長1.55m）を付与し（豊編 1954、松崎 1979d）、3号古墳の副葬品の情報（獣形鏡・鉦（刀子）・管玉）を転記した可能性が高くなる（松村 1979、石井・三枝編 2004）。そうであれば、今回調査した第2号古墳の箱形石棺ST01から出土した副葬品の情報ではない可能性が高くなる。現在、長者スクモ塚第2号古墳とされている古墳は従来第3号古墳と呼称されていた可能性も残るものの（永野 2018）、第3号古墳が滅失し、その情報の一部が第2号古墳に付与された可能性も指摘しておきたい。（野島）

### 3. 長者スクモ塚第2号古墳発掘調査の年次概要

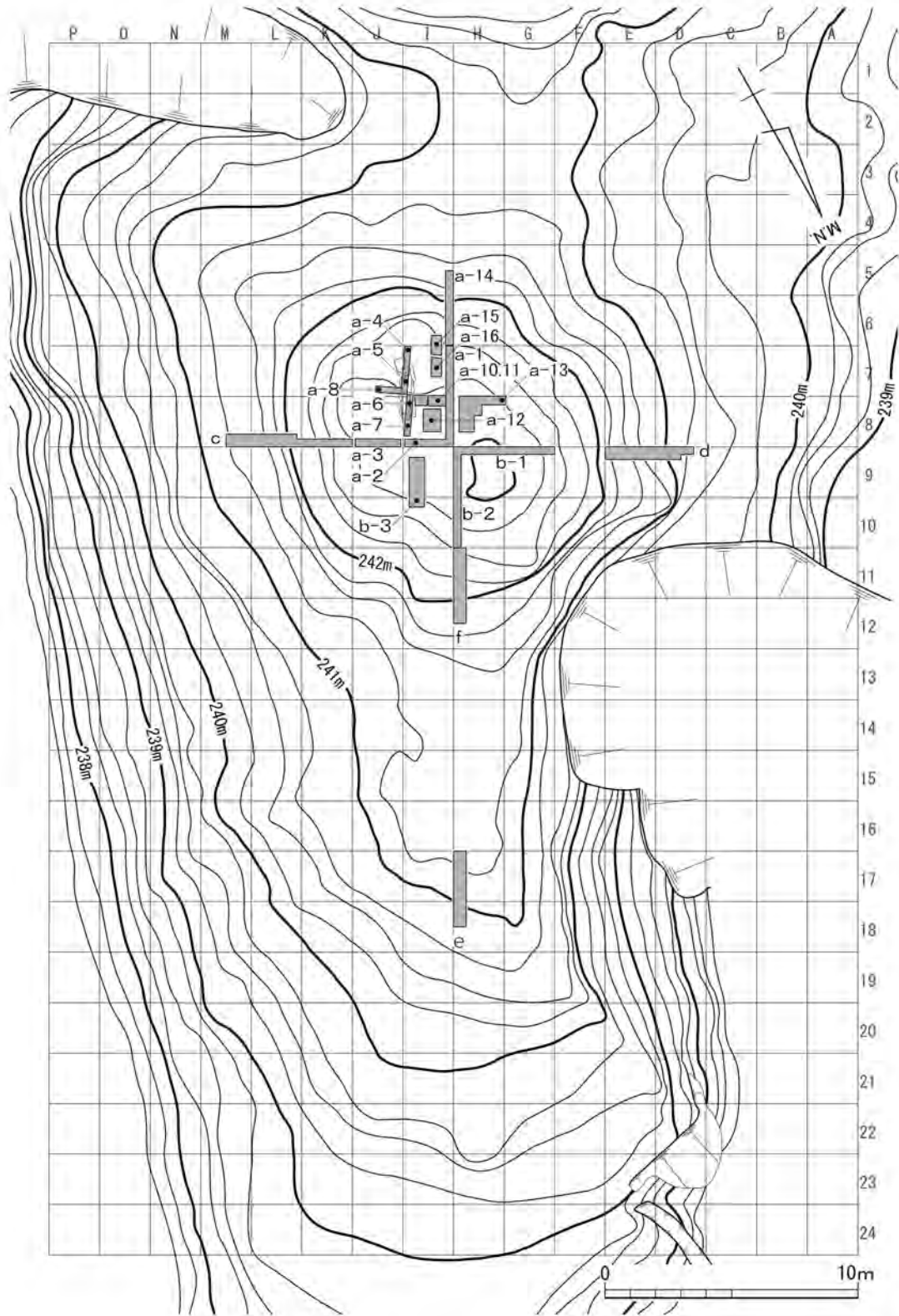
#### (1) 長者スクモ塚第2号古墳の測量調査（第2次調査）

第1号古墳、および第2号古墳の測量調査については、広島大学考古学研究室の紀要10号に詳述されている（下江・永野・藤澤 2018、永野 2018）。測量調査からは、長者スクモ塚第1号古墳は前方部短小型の前方後円墳であり、墳丘規模は墳丘長60.0m、後円部は短径40.5m、長径42.5m、高さ6.5～7.5m、前方部は長さ19.5m、幅20.5m、高0.75～1.0mと推定された（下江・永野・藤澤 2018）。また、長者スクモ塚第2号古墳は墳丘直径18m前後、高さ2.2m前後の円墳か、あるいは墳丘長28.5m、後円部径18.3m、現状の後円部高2.2m、前方部長10.2m、前方部前面幅8.8m、前方部高0.75mとなる前方後円墳と推定された（永野 2018）。

#### (2) 長者スクモ塚第2号古墳の発掘調査（第2次～第4次調査）

**第2次調査（2017年度）** 第2号古墳の発掘調査は測量調査と併行して、2017年9月2日から24日、および2018年3月24日から4月1日に行った（長者スクモ塚古墳群第2次調査）。9月は円丘部上の遺構確認のため、a-1～a-3調査区、b-1・b-2調査区を設定して掘削し、盛土堆積状況および埋葬施設などの確認を行った。翌年3月には露出していた箱形石棺ST01の設置状況や墓壇掘形を確認するため、a-4～a-9調査区を設定して掘削した。石棺内遺存物の確認、埋葬施設の構築に関わる情報収集にも努めた<sup>(7)</sup>。

2017年9月は第2号古墳測量調査と併行して行った。9月2日から樹木の伐採や墳丘の清掃の後、墳丘北東部に前方部と想定できる等高線の隆起を確認していたことから、この隆起部分（推定前方部）を含めて全体を2mのグリッドに区分した。南西隅の交点をグリッド名として、東西HとIの間のグリッド・ライン、南北8と9の間のグリッド・ラインの交点を円丘部（後円部）の仮の中心とし、東西（A～P）32m、南北（1～24）48mのグリッドを設定した。しかし、トータル・ステーションの取り扱いに関して十分な準備を怠っていたため、グリッドに沿った基準プラスチック杭（p.I9, p.I17, p.I25, p.M9, p.E9）を設定するのに、多くの時間を割かねばならなかった。9月5日からは露出していた箱形石棺ST01の現存状



第3図 長者スクモ塚2号古墳調査区配置図（1/250）

況の平面図の作成を開始した。9月8日からは円丘部のp.I9の周辺にトレンチ設定のための木杭を設置した。円丘部（後円部）墳頂部南半をa調査区、北半をb調査区とし、墳頂中央で十字になるようにL字形調査区を2つ配置した<sup>(8)</sup>。9月9日には、b-1・b-2調査区の掘削を開始した。基準杭に誤差が生じていたため、a-1調査区の掘削は9月13日からとなったが、a-2・a-3調査区の掘削を順次開始した。これまで収集した情報から、繰り返し乱掘されていたことが判明していたため、掘削排土に遺物が存在する可能性も考慮し、すべての排土を5mmメッシュで篩い、副葬品片や玉類など微細遺物の検出に努めた。a-1調査区の北側で木棺直葬墓ST02掘形上面の粘質土層を検出し、a-3調査区の中央（SK03）、b-2調査区の南側（SK04）で新しい段階と考えられる土坑を確認した。その後、b-1調査区およびa-1調査区の平面図、土層断面図を順次作成した。なお、9月23日には墳頂部に他の箱形石棺を検出するために、I-8・H-8・H-9グリッドを中心に10cm間隔でピンポールを刺して地中探査を行ったが、石材からなる埋葬施設を確認することはできなかった。9月24日までに各調査区の写真撮影を終え、各調査区掘削停止面に20cm角のマイラーフィルム片を置いて、排土を篩った土で埋め、花崗岩バイラン土（真砂土）で覆った。ドローン（PHANTOM4, Pro）を使用し、長者スクモ塚古墳群の西側からの遠景となる空中撮影を行った（図版第1a）。

翌年3月24日から4月1日まで、露出した箱形石棺ST01の平面図の修正とともに、箱形石棺内に堆積した近現代と考えられる埋土の除去、床面構築状況の確認（a-5・a-6調査区）と石棺墓壇掘形と石棺の設置状況の確認（a-4・a-7・a-8調査区）を行った。

3月24日から箱形石棺の清掃、現状の写真撮影を行い、箱形石棺ST01埋土の除去と石棺四方の断割り（a-4・a-7・a-8・a-9<sup>(9)</sup>調査区）を開始した。3月26・27日には墓壇掘形をほぼ確認した。箱形石棺ST01周囲の掘形内には灰白色の粘土を数回貼り込んで充填していた状況などについて観察し、図化・写真撮影を行った。なお、箱形石棺内の埋土から副葬品片や玉類などは検出できなかった。4月1日には、調査区発掘停止面にマイラーフィルム片を残して、篩った排土と真砂土で埋め戻しを行った。

**第3次調査（2018年度）** 長者スクモ塚古墳群第3次調査は、2018年9月1日から9月21日、2019年3月24日から4月1日に行った。9月にはおもに墳丘形態の確定のため、円丘部（後円部）墳丘周辺にc・d・f調査区、および推定前方部の墳丘確認のために、その前端にe調査区を設置し、墳丘盛土および土層堆積状況の確認を行った。さらに、翌年3月には、箱形石棺ST01西側墓壇掘形とa-9調査区で確認されていた粘土の貼り込み部分の再確認のため、a-10・a-11調査区を設定した。その結果、粘土貼り込み部分を木棺直葬墓（木棺下部）と判断した。そして、a-12・a-13調査区を設定し、木棺直葬墓ST02の墓壇全体の平面範囲の確認を行った。

2018年9月2日から清掃、9月5日にc・d・e調査区の掘削をそれぞれ開始し、土層堆積状況を確認しつつ掘り進めた。9月11日にはf調査区の掘削を開始した。e調査区では前方部と考えられる墳丘盛土などは確認できず、表土（第1層）直下に地山が検出されたことか

ら、前方部の築造は可能性としてきわめて低いと判断した。それぞれの調査区の墳丘盛土の堆積状況を確認して、図化・写真撮影を行った。9月21日には昨年同様、調査区掘削停止面にマイラーフィルム片を残し、篩った排土と真砂土で埋め戻しを行った。

翌年3月24日には、箱形石棺ST01の横に置かれた蓋石材をチェーンブロックで持ち上げて移動させた。3月26日から箱形石棺ST01西側の掘形再検出ため、a-10調査区を設定し、a-1調査区と直交するa-10調査区に、箱形石棺ST01の主軸に直交したa-11調査区を連結させて掘削し、土層断面を観察した。その結果、箱形石棺ST01の墓壙および裏込め土層が木棺直葬墓ST02の墓壙掘形によって破壊されていることを再確認した。これにより、箱形石棺ST01の設置後に木棺直葬墓ST02が営まれたことが判明した。3月27日にはa-12・a-13調査区の掘削を開始した。3月29日にはa-12・a-13調査区で検出した木棺直葬墓ST02の墓壙掘形を一部断割り、断面土層での再確認を行った。調査終盤になり、a-1・a-10調査区をさらに掘削したところ、a-1調査区南半部分はほぼすべて現代に攪乱されていたことも判明した。墳丘の南側（a調査区側）は、かなりの部分が盗掘等による攪乱を被っていたことが明らかとなった。4月1日には昨年同様、調査区掘削停止面にマイラーフィルム片を残し、篩った排土と真砂土で埋め戻しを行った。また、露出していた箱形石棺ST01の内部・上部に真砂土を入れた土嚢で覆って石棺の崩壊、石材の遺失を防止することとした。

**第4次調査（2019年度）** 長者スクモ塚古墳群第4次調査は2019年8月28日～9月18日に行った。第2号古墳墳頂部と第1号古墳後円部墳頂部において地中レーザー探査を行った。第2号古墳では、地中での埋設物などが想定できたI-9グリッド周辺（b-3調査区）を掘削した。また、第2号古墳墳丘南側にa-14調査区、露出していた蓋石あるいは側石と想定した板石の南北にa-15・a-16調査区を設定し、土層堆積状況の確認調査を行った。

8月29日には長者スクモ塚第1号古墳後円部および第2号古墳の墳頂部を清掃し、埋葬施設を確認するための地中レーザー探査を行った。9月3日からb-3調査区、a-15・a-16調査区の掘削を開始した。第3次調査の終盤で確認した大規模な攪乱坑の南端掘形を再確認した。よって、墳頂部南端で露出していた板石は墳丘南半、a-1・a-10調査区で確認された大規模な攪乱坑が掘り込まれた際に遺棄された石棺石材とみることができた。b-3調査区も墳丘盛土と地山を確認したが、埋葬施設を検出することはできなかった。9月7日にはa-14調査区も掘削を進めたものの、盛土は検出できず、地山成形部分であったとみることができた。9月11日には昨年同様、調査区掘削停止面にマイラーフィルム片を残し、篩った排土と真砂土で埋め戻しを行った。 (野島)



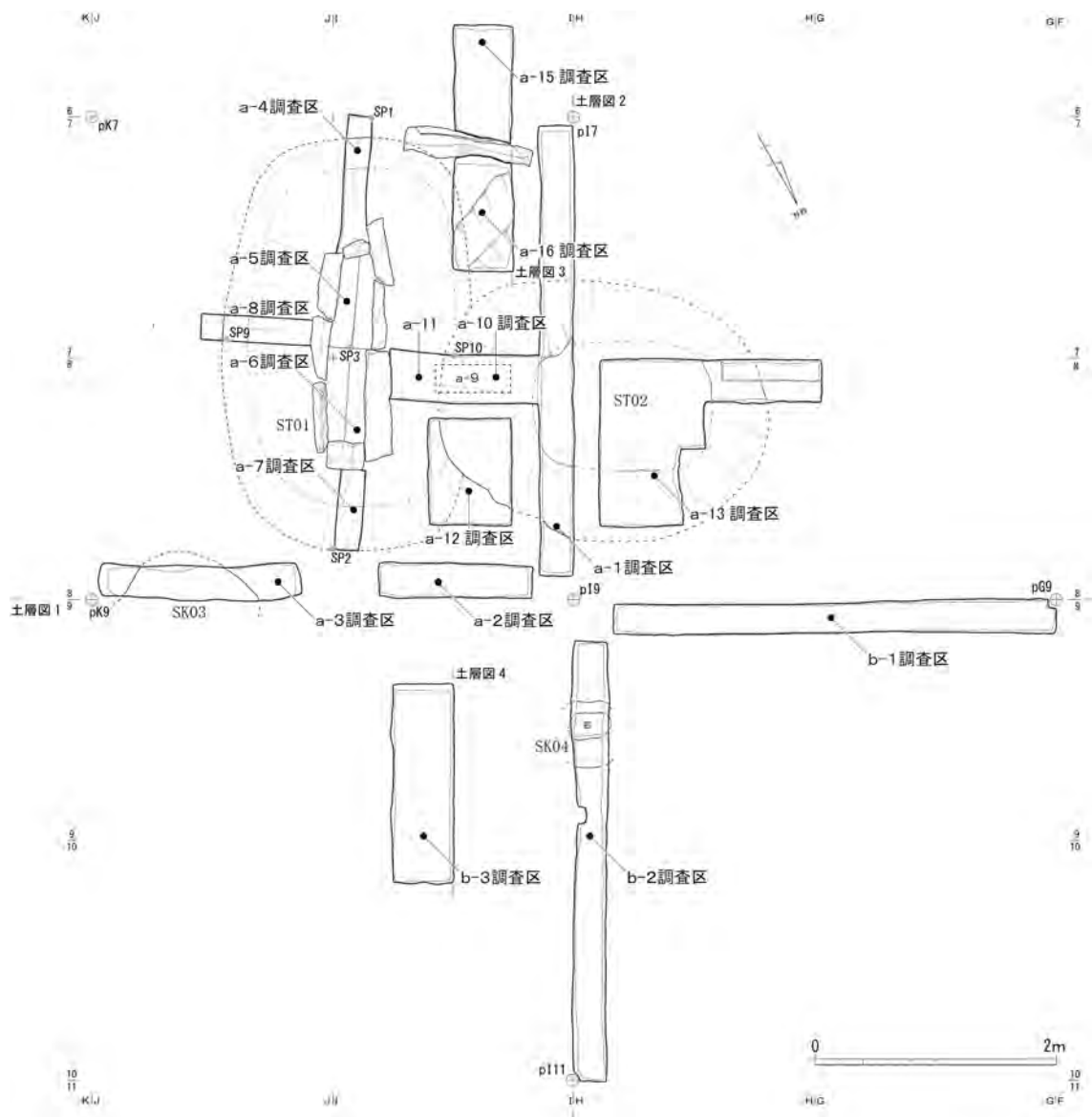
4. 長者スクモ塚第2号古墳の調査区と検出遺構

(1) 調査区の設定と調査状況

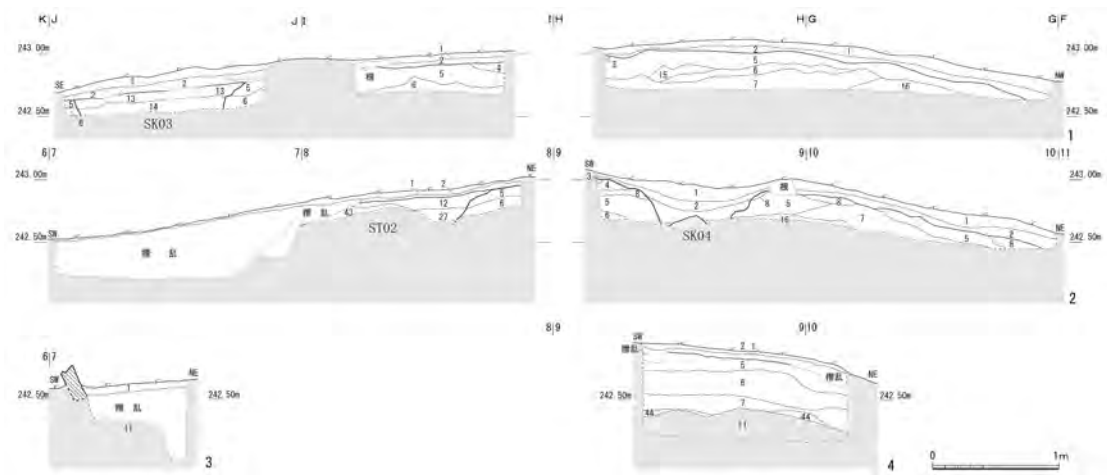
a. 墳頂平坦部 (図版第1b～5・8～12b、第4・5・8・9図)

a-1・2・3調査区 (図版第1b・2・3a・4、第4・5図) 第2次調査において、調査以前から露出していた箱形石棺ST01以外の埋葬施設の検出、および墳頂部の土層堆積状況の確認のために設定した。a調査区はグリッド8と9の間のラインから南側の墳頂平坦部とした。p.19を基点としてI-7・J-7・I-8・J-8グリッドの4m四方の北西辺と北東辺に沿って幅0.3mのL字形トレンチを設定し、北西側をa-1調査区、北東側をa-2・a-3調査区とした<sup>(10)</sup>。

a-1調査区では、北寄りの地点で、表土(第1・2層)下10cmほどにおいて、後述する



第4図 スクモ塚2号古墳墳頂部調査区配置図 (1/60)



第5図 長者スクモ塚2号古墳墳頂部土層断面図（1/60）

木棺直葬墓ST02の被覆粘質土（第43層）上に第12層を検出した。第12層は木棺の粘土被覆の一部を取り込んでおり、墳丘盛土第5層を掘削したST02墓壇の最終的な埋め戻し土と判断した。また、南寄りp.I7付近では、第2次調査の掘削当初から、表土下5cm前後でビニール紐やペットボトル片などを検出し、下層が現代に改変されている可能性が高いことが推測された。その後、第3次調査において、a-1調査区南西側に攪乱が広く及んでいることが明らかとなったことから、攪乱坑の埋土を除去し、断面の土層堆積状況を記録した。その際にもST02上面の木棺被覆粘質土層（第43層）を再度確認した。

a-2調査区でも、表土下で墳丘盛土第5層を確認し、それ以前の盛土と想定した第6層上面まで検出した。a-1調査区と同様な盛土堆積状況と判断した。

a-3調査区では、中央で隅丸方形に広がると思われる土坑SK03を部分的に検出した。表土層第2層直下から深く掘削されていた。土坑掘形は非常に明瞭であった。埋土（第13・14層）自体も盛土とは異なり掘削しやすく、赤く汚れた砂質の褐色土であったことから、新しい時期の掘り込みと想定することができる。

**a-5・6調査区**（図版第8・9a、第4・8図） 第2次調査において、露出していた箱形石棺ST01の棺内の残留土内に副葬品片などの遺物が含まれているか確認しつつ、土層堆積状況を把握するために設定した。石棺内を十字に四分し、南側をa-5調査区、北側をa-6調査区とした。a-5調査区では、表土層（第1・2層）の下に棺露出後の自然堆積による第28層があり、その直下には棺底に貼り込まれた粘土（第29層）が検出された。a-6調査区では、第1層を除去した時点で、北側に盗掘目的と考えられる小さな攪乱坑がみられた。攪乱坑の埋土を除去し、掘削を停止した。下層の掘削は行わなかった。いずれの埋土も5mmの篩でふるって微細遺物の検出に努めた。その結果、弥生土器細片（図版第12c-2、第10図2）が出土した。また、a-5調査区第29層から土師器細片（図版第12c-5）が出土した。第29層は棺床を構成する粘土と思われるが、かなり厚く10cm程の堆積がみられた。また、第29層の上面に北西側の側石の下面が接しており（第8図土層図1）、一部棺台床面として整地

されたとみて間違いはない。第29層上面が棺床となると、被葬者遺骸を安置した空間はわずか30cm足らずとなる。

**a-4・7・8・9調査区**（図版第9b・c・10a・b、第4・8・9図） 第2次調査において、露出した箱形石棺ST01の四方に墓壇掘形の断面確認のために設定した。掘形掘削状況を土層断面によって確認するとともに、掘削中に石棺周囲に貼り込まれたやや緑がかった灰白色の粘土層（第19・23層）を検出した（図版第9b・c・10、第8・9図）。

**a-10・11調査区**（図版第10c、第9図3、第4・8・9図） 第3次調査において、露出した箱形石棺ST01の蓋石とみられる板石を除去後、木棺直葬墓ST02と箱形石棺ST01の墓壇の切り合い関係を今一度明らかにするために、第2次調査のa-9調査区に重複するように設定し、a-9調査区北壁を再精査し、土層堆積状況を再確認した。a-10調査区は木棺直葬墓ST02の推定主軸に沿った方向に設定し、a-11調査区は箱形石棺ST01の主軸に直交して設定したため、互いに174度ほどの角度で接することとなった。再確認の結果、やはりa-10・11調査区北壁断面において、箱形石棺ST01の西側掘形とその埋土を切り込むようにして木棺直葬墓ST02の墓壇掘形が掘削されていた。よって、箱形石棺ST01を埋置した後に木棺直葬墓ST02を設置したと考えることができる。なお、ST02墓壇最下層には木棺床に貼られた明緑灰白色粘土（第26層）が厚く堆積している状況を確認することができた（図版第10c左下）。第26層はST01の棺周囲に貼り込まれたやや緑青がかった灰白色の粘土層（第19・23層）とほぼ同様の土質であったことから、おそらくは同じ場所から採掘した粘土と推測することができよう。このため、両者はそれほど時期を経ずに埋葬を継続した可能性がある。

**a-12調査区**（図版第11a・12a・b、第4・9図） 第3次調査において、木棺直葬墓ST02の東側の墓壇を平面的に検出するために設定した。表土（第1・2層）を除去したものの、a-10・11調査区北壁断面で認められたように、掘形上面は緩やかに立ち上がるため、平面的な検出が難しく、充填土層（第27層）を一部削平しつつ、ST02の墓壇掘形北東側の輪郭の一部を検出した。

**a-13調査区**（図版第11b・c・12a・b、第4・9図） 第3次調査において、木棺直葬墓ST02の西側の墓壇・被覆粘土等を平面的に検出するために設定した。表土（第1・2層）を除去した後、ST02墓壇掘形西側の一部を検出した。また、西端で一部掘形部分を掘削し、墓壇掘形の断面形状を再確認した（第9図2北西側土層断面）。a-1調査区で確認された被覆粘質土（第43層）は明るい黄色味を帯びた粘土を含んでいるが、ST02の墓壇底面（第26層）やST01石棺周囲の掘形に貼り込まれていた粘土（第19・23・29層）とは異なる。おそらくはST02の墓壇底面やST01石棺周囲に貼り込まれた粘土とは異なる地点で採掘され、砂質土を一部混ぜ合わせたものであったと考えられる。a-1調査区同様、平面的な検出にとどめ、その上面の範囲を確認したが、第43層は墓壇全体を被覆していたわけではなかったことから、木棺上面のみを被覆していた可能性が高い。

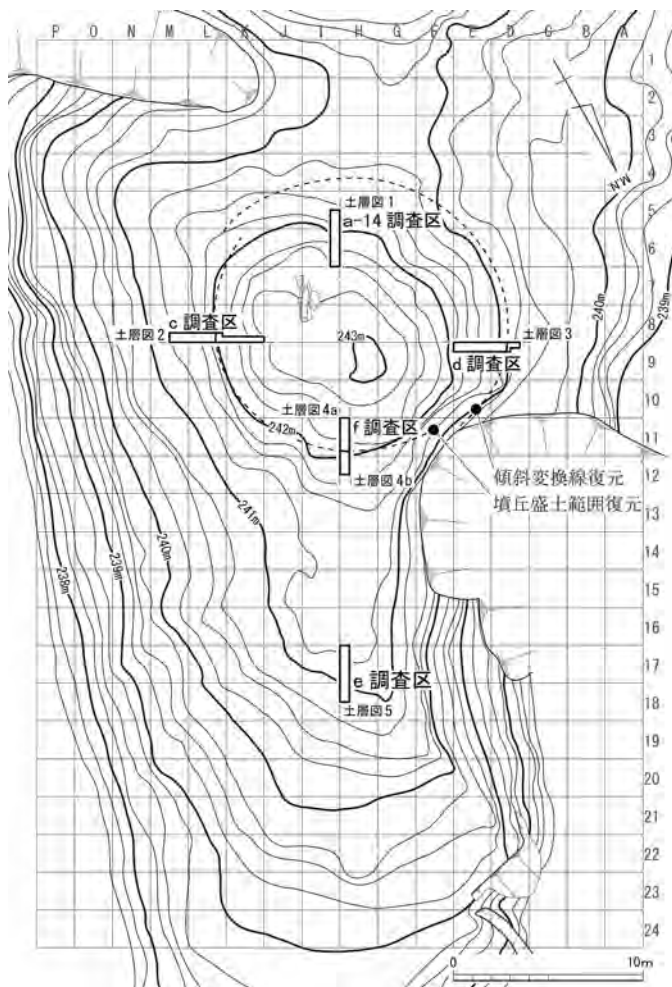
**a-15・16調査区**（第4図・第5図3） 第4次調査において、a調査区南端に位置し、ほぼ垂直に埋置していた板石が箱形石棺側板であり、かつ原位置に遺存している可能性を考慮し

て、その棺外（a-15調査区）・棺内（a-16調査区）と想定された位置<sup>(11)</sup>に調査区を設定した。いずれも埋葬施設の掘形などはなく、a-16調査区においては墳丘南側の大攪乱坑の南掘形を検出した（第5図3）。

**b-1・2調査区**（図版第3b・5a・b、第4図・第5図1・2）第2次調査において、b調査区はグリッド8と9の間のラインから北側の墳頂平坦部とした。a-1～a-3調査区同様、p.I9を基点としてG-9・H-9・G-10・H-10グリッドの4m四方の南西辺と南東辺に沿って幅0.3mのL字形トレンチを設定し、南西側をb-1調査区、南東側をb-2調査区とした<sup>(12)</sup>。b-2調査区南側で攪乱坑と思われる土坑SK04を検出した。埋土中央には丸みのある扁平な石材が置かれていた。

**b-3調査区**（図版第5c、第4図・第5図4）第4次調査において、第2号古墳墳頂部の地中レーザー探査の結果、地中に埋設物が想定できた部分をb-3調査区として掘削した。ほぼ水平に堆積した墳丘盛土（第5・6・7・44層）を確認したものの、埋葬施設の検出はできなかった。

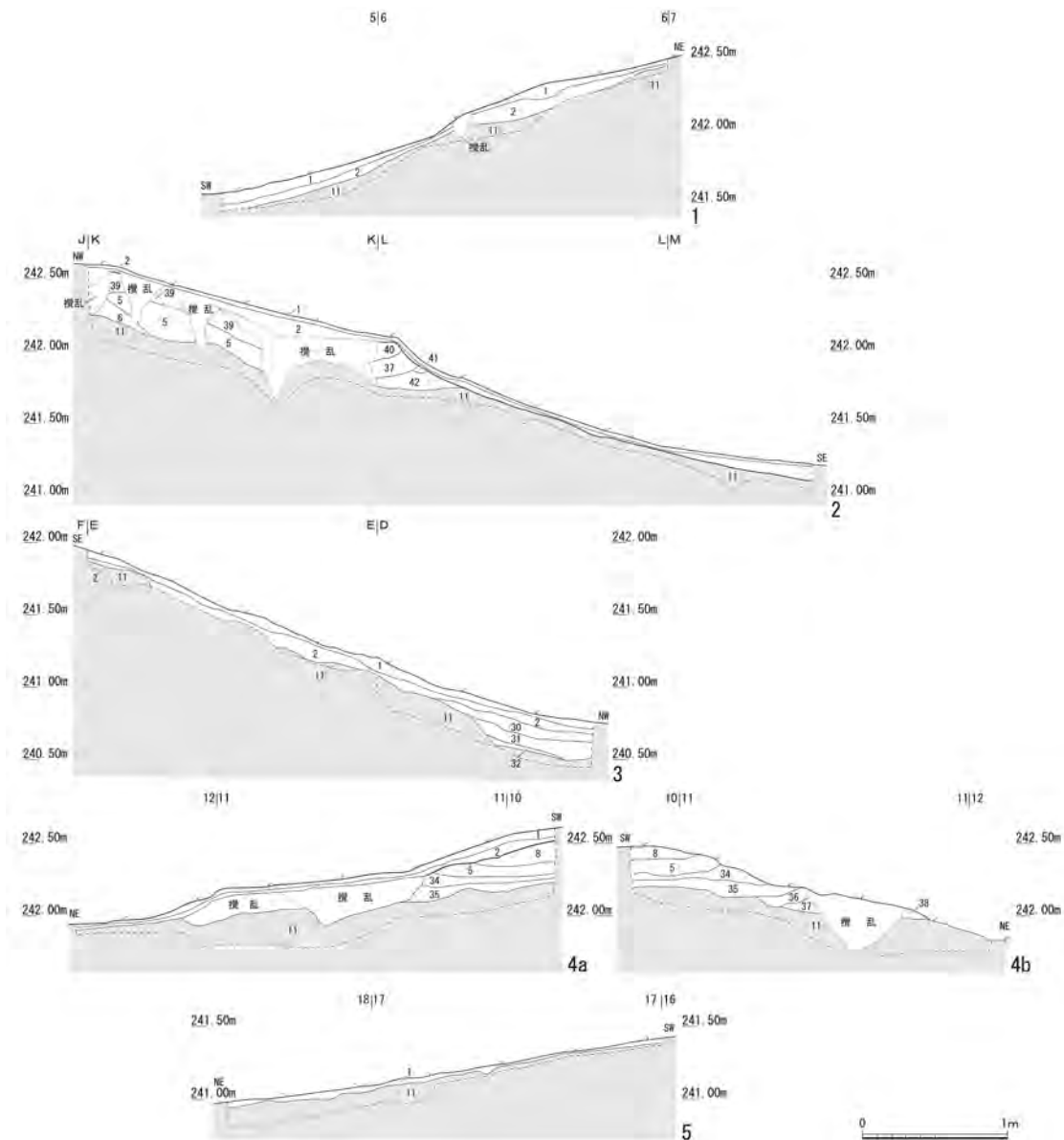
#### b. 墳丘周辺部（図版第6・7、第6・7図）



第6図 長者スクモ塚第2号古墳墳頂調査区配置図 (1/400)

**a-14調査区**（図版第7c、第6図・第7図1）第4次調査において、南側墳丘盛土を確認するために設定した。a-1調査区に接続する。しかし、墳丘盛土はみられず、地山削り出しの成形であったと考えられる。現状では、a-14調査区の南西半分は過去の墳丘形状を示すものではなく、現代に削平され、改変された状況を示しており、地山の傾斜自体、過去の墳丘形状とは関わりがないとみられる。

**c調査区**（図版第6a・b、第6図・第7図2）第3次調査において、東側墳丘端部と墳丘構築状況を把握するために設定した。a-2・a-3調査区に接続する。木根による攪乱が著しかったものの、地山の上に墳頂平坦部を覆う第5層盛土を確認した。さらにその上に地山の花崗岩バイラン土を含む明褐色の砂質土層（第37・39・40層）が堆積している



第7図 長者スクモ塚2号古墳墳裾調査区土層断面図 (1/50)

状況を確認した。

**d 調査区** (図版第6c、第6図・第7図3) 第3次調査において、西側墳丘端部と墳丘構築状況を把握するために設定した。b-1調査区に接続する。墳丘南西側、a-14調査区同様に表土下には地山が露出していた。墳丘裾では地山を削り出して墳丘を成形したものとみられる。墳頂平坦部や傾斜面からの墳丘流出土(第30・31層)が確認された。

**f 調査区** (図版第7a・b、第6図・第7図4a・b) 第3次調査において、北側墳丘端部と墳丘構築状況を把握するために設定した。調査区北側で盗掘などによる攪乱があり、墳丘盛土端部付近が明瞭ではないが、墳頂平坦部を覆う第5層の下層に初期の盛土(第34~38層)を確認した。地山の花崗岩バイラン土を含む砂質土をほぼ水平に堆積させており、西壁(第7図4b)で確認した第38層が墳丘の北側端部になるものと想定できる。

e 調査区（第6図・第7図5） 第3次調査において、前方部前端と想定された尾根線上の緩やかな斜面部分に設定し、墳丘盛土の有無を確認した。表土下には地山が露出しており、円丘部分の北側、前方部と想定された場所が自然地形であることがほぼ明らかとなった。

## （2）墳丘の形状と規模

長者スクモ塚第2号古墳はこれまでの測量段階では、全長28.5mほどの小型の前方後円墳の可能性も指摘されていたが（永野 2018）、e・f 調査区の掘削で確認した土層堆積状況から、前方部と想定された部分は自然地形と考えることができたため、円墳であった可能性が高い。長者スクモ塚第1号古墳の北東側、花崗岩バイランの地山の尾根筋を中心にわずかな墳丘を盛り上げた円墳としておきたい。墳頂平坦部に広く堆積していた盛土（第5層）との先後関係からみれば、傾斜の強い墳丘南西側の地山を削り出した上で、墳丘北東側の尾根周辺に盛土を行い、水平に近い堆積面を確保してから、平坦部に広く盛土を行った後に円丘中央部に盛土を追加して墳丘全体を成形していったものとみられる。箱形石棺ST01の墓壇掘形は地山と第6層によく似た第7層盛土を掘削して形成されているのに対して、木棺直葬墓ST02の墓壇掘形は墳頂部北東側に広がる第5層盛土から掘削されていたことから、第5層盛土がST01の埋葬の後であった可能性も想定できる。平面的に見れば、地山成形部分のほぼ中央にST01が配置されているようにみられることは、埋葬ごとに墳丘盛土が少しずつ付加されていった状況を示す可能性も指摘できよう。

いずれにせよ、長者スクモ塚第2号古墳はc・f 調査区の墳丘盛土の残存状況から復元すると墳丘の大きさは東西幅15mにも満たない。d 調査区のように、地山の傾斜変換点を墳丘端部と認識すると、およそ東西17m前後となり、やや歪な円丘の墳形となることが判明した（第6図）。斜面が急で墳丘端部が低くなる南西側はなるべく地山削り出しを行って成形し、尾根筋周囲の北東側は墳丘裾部から盛土を施していた状況を確認することができる。南側からの墳丘景観を意識した最小限の土木工事であったといえる。

また、おそらくは少なくとも2基の箱形石棺があり、加えて1基の木棺直葬墓が検出されたわけである。3回以上の埋葬ごとに墳丘盛土が付加されたものとみられる。墳丘調査結果と、石材が南側に散乱していた現況からみて、地山成形を施した墳丘南側に箱形石棺が近接して2基あったものと想像することができる。

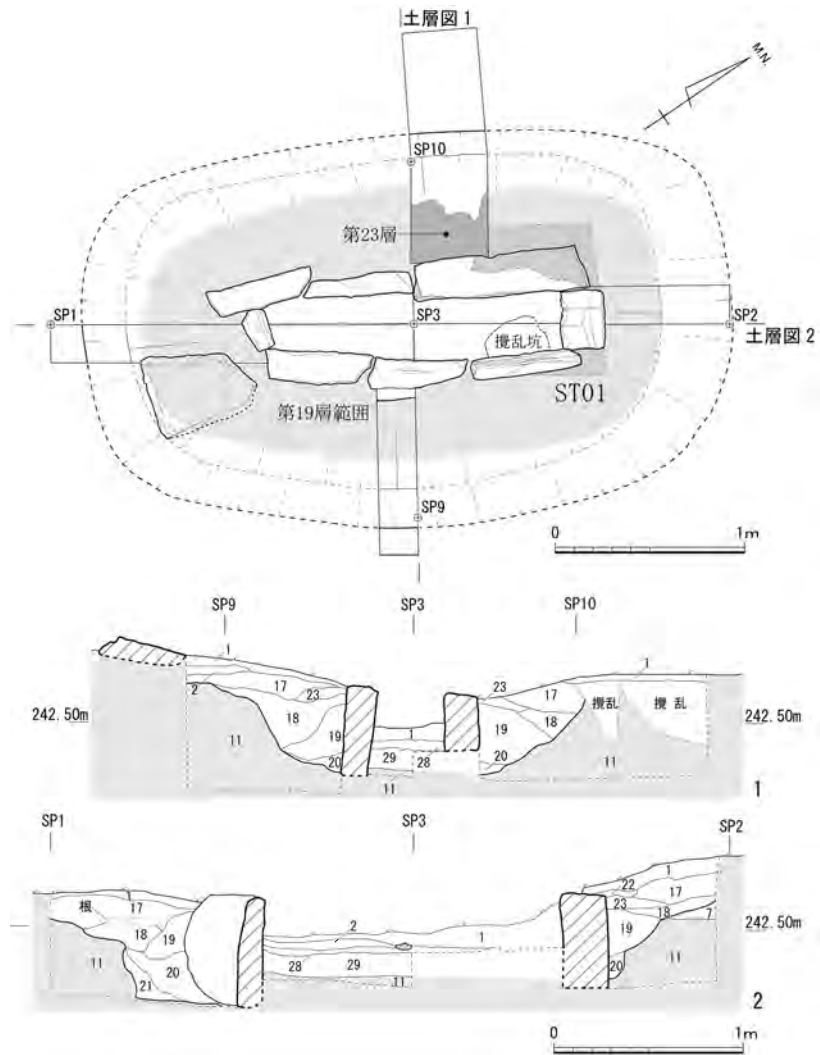
## （3）検出遺構

### a. 箱形石棺（図版第8～10、第4・8図）

箱形石棺ST01（第1号箱形石棺、（図版第8～10、第4・8図））先述したように墳頂平坦部には、少なくとも70年以上前からすでに箱形石棺が露出していた。発掘調査以前にも周囲に蓋石や側石と思われる板石材が散乱していたが、現在では箱形石棺として認識できる遺構はひとつしかない。これを第1号箱形石棺（ST01）とした。第1号箱形石棺の周囲には、蓋石や側石と想定できる大きな板石が4枚遺存していたが、いずれも原位置を保っているのではなく、後世の盗掘の際に動かされたものと思われる。石棺南西の板石材は、過去の墳丘測量図に記録がなく、その遺存状況の経緯が不明であった。先述したように第4次調査にお

いて、この板石材の前後（南北）に a-15・16調査区を設定して掘削したところ、攪乱抗を検出したことから、もともと存在した石棺側石が露出したわけではなく、近年の盗掘により移動させられた可能性が高くなった。

**第2号箱形石棺について** 先述したように、かりに従来の第3号古墳が第2号古墳だとすれば（永野 2018）、既往調査に記した文献（鈴木・池田 1950、2頁）から、箱形石棺 ST01から「2 mと離れぬ所」に存在していたとみられるが、その可能性は低い。しかし、石棺が2基存在してい



第8図 長者スクモ塚2号墳箱形石棺ST01実測図 (1/40)

たことは確かと思われることから（永野 2018、註（8））、これを第2号箱形石棺と呼称する。現在では石棺を構成したと思われる板石材も散逸したようである。箱形石棺ST01に近い地点に存在していたとすれば、a-1調査区南半で確認した大きな攪乱抗掘削の際に残存していた板石材ごと掘り返されたとも想定できる<sup>(13)</sup>。

**箱形石棺ST01の規模と外観** 箱形石棺ST01は円丘部中心より2mほど南側に位置していた。厚さ15~20cm、幅30~60cm、長さ50m~90cmほどの扁平な花崗岩割板石を長側石として使用していた。長側石は両側それぞれ3石ずつ用いられ、割板石の主面でもより平坦な一面を内側にし、横長に並べて設置されていた。小口石は、比較的小さな割石材がそれぞれ1点ずつ用いられていた。長側石が小口石を挟み込む形態である。南側の小口石は北側のそれよりかなり小さく、石棺長軸に対して正対していないが、南西隅の側石の形状、および西側中央の側石との接続状況からすれば、当初からこのような状態であった可能性が高い。このため、頭位は北側と思われる。石室内法の中央長さ1.52m、北側（頭位側）幅0.33m、南側（足位側）幅0.24mで、貼床からの石棺側石の高さはおおよそ29~30cmであった。南小口内面

中位を中心に赤色顔料の塗布痕跡がみられる（図版第9a）。70年以上露出していた部分の観察であることから、おそらくは石棺内面のかなりの範囲に赤色顔料が塗布されていたのであろう。

**箱形石棺ST01墓壇掘形の検出と貼込み粘土**（図版第9b・c・10、第8図） 箱形石棺ST01の周囲に南北長さ約3.45m、東西幅2.1mとなる墓壇を検出した。おそらくは隅丸方形に近い掘形平面形をもつとみられる。二段に掘りこまれており、下段は長さ2.85m、幅1.75mほどになる。上段掘形とは相似形にちかくなると思われる。墓壇は地山を掘り込んでおり、北側のわずかな部分のみ、第7層盛土の上から掘削していたことが判明した。

また墓壇には粘土層が2層（第19・23層）堆積しており、墳丘盛土とよく似た裏込め土と交互に貼り込んでいたことも観察できた（第8図）。長側石両側と北側小口部分の掘形では、棺石材を置いた後にその外面底部に赤味の強い橙色の砂質土（第20層）を詰め込み、その上部に緑色を帯びた灰白色粘土（第19層）を貼り込んでいた（第8図上、トーン部分復元）。その後、盛土に似た褐色土（第18層）をほぼ水平に埋め置いて、石棺上面の周囲を水平に堆積させた後に、第19層と同じ灰白色粘土（第23層）を再度置いて整地を行っていたことが判明した。なお、南側小口部分で想定される第23層のレベル高は現地表面にあたり、削平されたものとみられる。この灰白色粘土（第23層）は石棺北側では、側石の上面にも付着していたことから、蓋石を置いた際に側石上面と密着し、棺を密閉するように工夫されていたものとみられる。また、水平に近い形に貼り込んでいたところから、蓋石設置前後、石棺周辺には貼り粘土による白い空間が作り出されていたことがわかる。石棺の設置後、幾度かの埋土貼り込み作業の工程があり、蓋石を架構設置する際には、内面が赤彩された石棺の周囲は白い粘土に覆われた状態になっていたとみてよい。

#### **b. 木棺直葬墓ST02**（図版第10c・11・12a・b、第4・9図）

木棺直葬墓ST02は今回新たに確認された埋葬施設であるが、南側の一部が盗掘目的と思われる大規模な攪乱坑によって破壊され、木棺下部に貼り込まれた灰白色粘土の一部が流出していた（図版第12a）。墳丘中心からやや南に位置していたようである。

**木棺直葬墓ST02墓壇の平面形態**（図版第11、第4・9図） 第2次調査のa-1調査区では、ST02墓壇は盛土（第5層）から掘り込まれていた。第3次調査において、a-12・13調査区を設置し、ST02の平面的状況の把握に努めた。その結果、墓壇掘形の南北の長さは2.7m前後であった。攪乱のため、西側が検出できなかったものの、東西の幅は推定2.1mほどとなろう。a-12調査区の平面検出では全体に丸みを帯びていたことから、楕円形になるものとみられる。墓壇の最終埋土（第12層）は、盛土（第5層）に黄色味を帯びた粘土を混ぜ合わせたような土であった。この最終埋土の下に木棺被覆粘質土（第43層）が堆積している状況が確認できた。

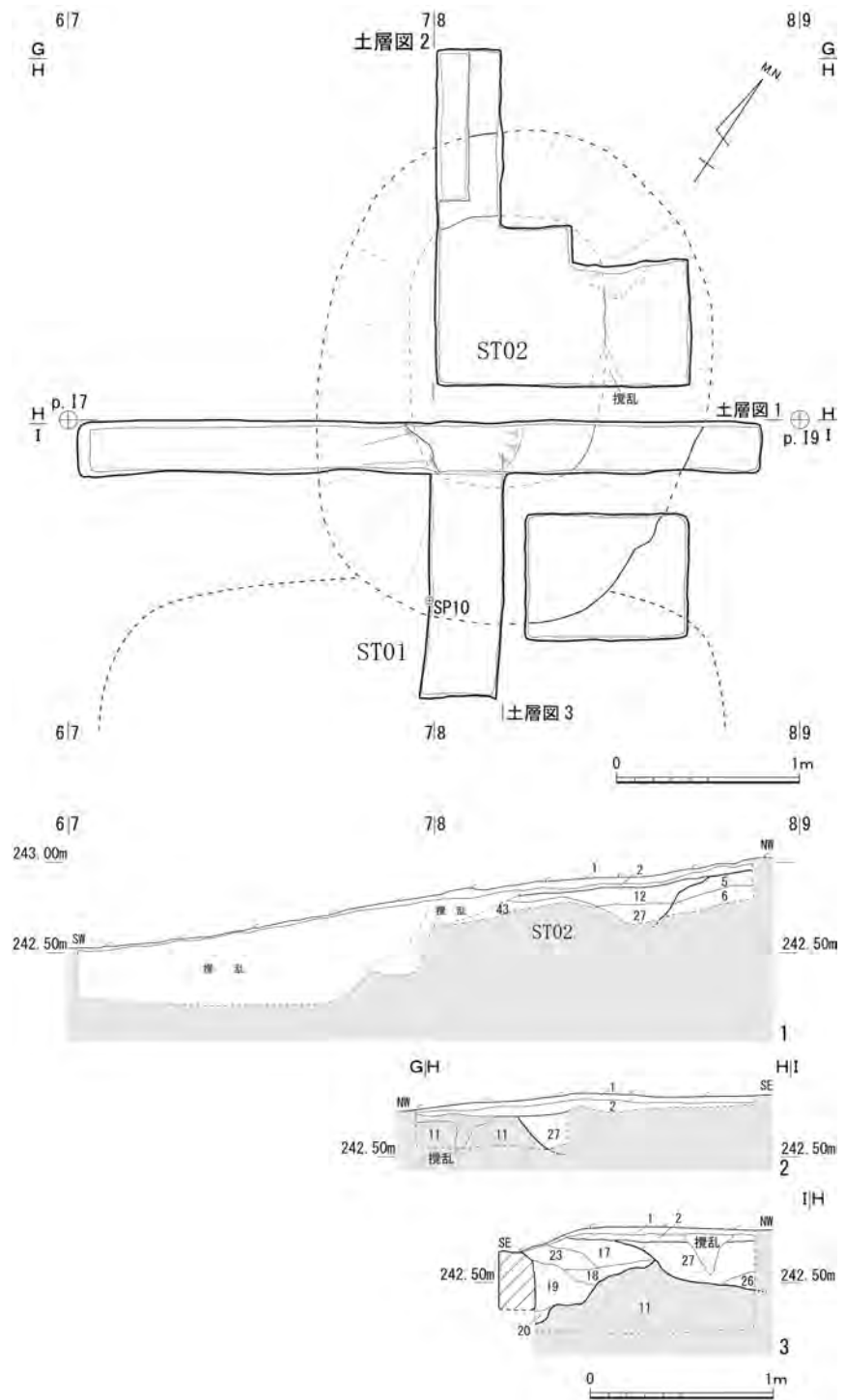
**木棺直葬墓ST02被覆粘質土の検出**（図版第3a・4a、第9図） 第2次調査のa-1調査区では地表下12cmほどで幅0.86mにわたって被覆粘質土層（第43層）を検出した。墓壇内に収まることから、被覆粘質土は棺の上部を覆っていたものと思われる。先述したように、a-1



調査区で確認された被覆粘質土（第43層）は明るい黄色味を帯びた粘土を含んでおり、ST02の墓壇底面の粘土（第26層）やST01石棺周囲の掘形に貼り込まれていた粘土（第19・23・29層）とは異なっていた。ST02の墓壇底面やST01石棺周囲に貼り込まれた粘土とは異なる地点で採掘され、砂質土を一部混ぜ合わせたものであったと考えられる。棺底と棺上では覆っていた粘土が異なることから、木棺の設置にはある程度の時間を見積もることができるかもしれない。

**ST02墓壇底面粘土の検出**（図版第10c・12a、第9図） 第2次調査のa-9調査区北壁、および第3次調査のa-10・11

調査区北壁においてST02の墓壇掘形を検出し、掘形底面に還元した灰白色粘土（第26層）が貼り込まれている状況を確認した。攪乱のため、墓壇中央部に向かっての堆積状況は把握できなかったが、東側端部の12cm、厚さ10cmを検出した。先述したように、ST01の掘形に貼り込まれた粘土（第19・23・29層）に土質が類似しており、採取場所が同じであったのではないかと思えた。なお、第3次調査において、a-1調査区を再度掘削して、攪乱坑の埋



第9図 長者スクモ塚2号古墳木棺直葬墓ST02実測図 (1/40)

土を除去<sup>(14)</sup>した際にも底面の粘土が流出した状況を確認した（図版12a）。

**箱形石棺ST01との時期的関係**（図版第10c、第9図3） 第2次調査のa-9調査区北壁、および第3次調査のa-10・11調査区北壁において、ST01、およびST02の墓壇掘形を検出した。先述したように、ST02の墓壇がST01の墓壇掘形とその埋土を破壊しており、ST02がST01の埋葬を終えたあとに設置されたものとみられる。ST01がおもに地山を掘削していたのに対して、ST02は墳丘盛土（第5・6層）を掘り込んでいたことも判明しており、埋葬施設の設置ごとに墳丘が付加されていたとみられる。ST01が墳頂平坦部南東側に位置するのに対して、ST02がより中央部に近い位置関係にある。

### c. その他の検出遺構

**攪乱土坑SK03**（図版第4c、第4図・第5図1） 土坑SK03はa-3調査区中央で検出された<sup>(15)</sup>。先述したように、幅1mほどの隅丸方形に広がると思われる。土坑掘形は非常に明瞭であり、埋土（第13・14層）自体も墳丘盛土・ST02埋土（第12・27層）とは異なり、柔らかい砂質の褐色土、赤褐色土であったことから、後世の掘り込みと想定することができる。

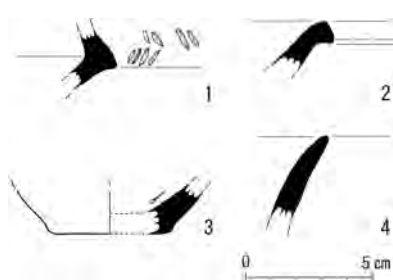
**攪乱土坑SK04**（図版第5a、第4図・第5図2） 土坑SK04はb-2調査区南側で検出した。南北0.55m、表土層が掘形内部に落ち込んでいたことから、かなり新しい段階の盗掘攪乱坑と想定した。検出だけにとどめた。（野島）

## 5. 出土遺物とその年代（図版第12c、第10図）

当古墳における一連の発掘調査で出土した遺物は非常に少ない。弥生土器、土師器を中心に17点の遺物が出土したが、すべて細片である。以下ではそれらのうち図化することのできた4点について報告する<sup>(16)</sup>。

### （1）弥生土器片（第10図1～3）

1はf調査区の第2層から出土した口縁部片である。小破片のため詳細は不明だが、受口状口縁をもつ甕の可能性はある。口縁部外面にはヘラによる刺突文が上下2段に施されている。内外面とも風化が激しく調整の観察は困難である。にぶい黄橙色を呈し、やや焼成不良気味である。胎土は径1.0～1.5mmの石英を多量に含む。受口状口縁甕であるならば、屈曲のゆるい頸部にやや内傾する口縁部をもつことから、弥生時代中期後葉になる。2はST01箱形石棺内埋土から出土した口縁部細片である。a-5・6調査区表土掘削時の排出土を篩つ



第10図 長者スクモ塚2号古墳  
出土遺物（1/3）

て検出した。口縁部は短く外反し、端部を下方につまみ出している。黒褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は1.0～3.0mmの長石・石英を多量に含む。口縁端部の形状から、弥生時代後期前半に位置づけられよう。3はf調査区の攪乱坑から出土した底部片で、底部復元径は4.6cmである。外面と底面にはナデが、内面は風化により不明瞭だがヘラケズリが施されると考えられる。明黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は0.5～3.0mmの長石・石英を多量に含

む。内面にヘラケズリが施されることから弥生時代後期となる。

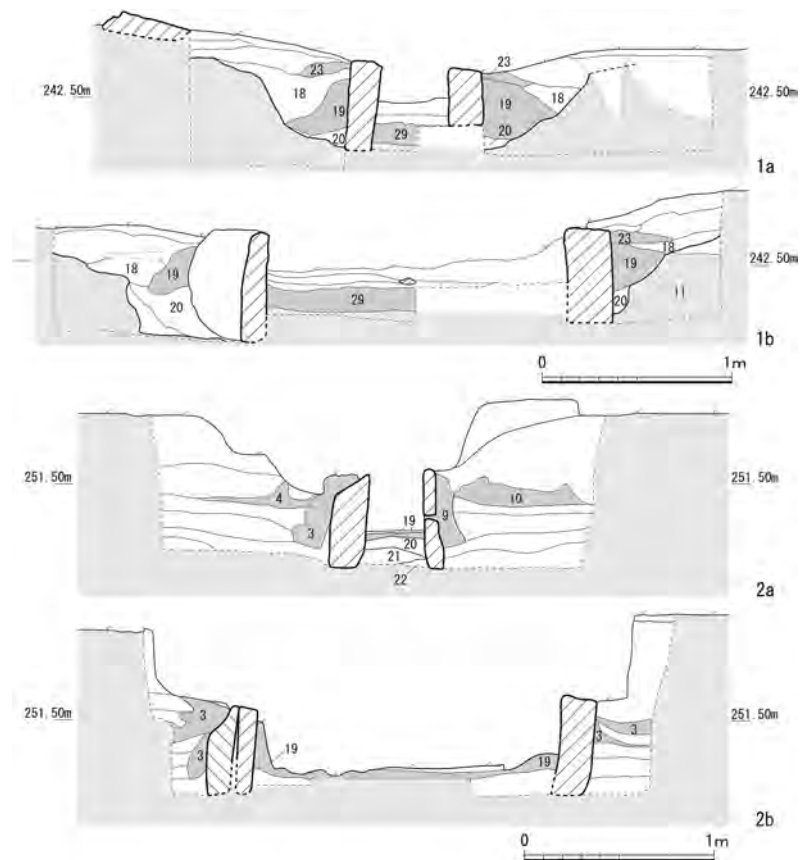
## (2) 土師器片 (第10図4)

4はa-14調査区の第2層から出土した口縁部片である。内外面ともに風化が激しく調整は観察困難である。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は0.5~1.0mmの長石・黒色鉱物・赤色鉱物を多量に含む。やや厚手で口縁端部に丸みをもつことから古墳時代前期に属する。この他、図化しえなかつたが、箱形石棺内(a-5調査区)第29層からも土師器細片が出土した(図版第12c-5)。(永野)

## 6. 長者スクモ塚第2号古墳の調査成果

### (1) 箱形石棺ST01における埋葬儀礼

箱形石棺ST01の構築方法は以下になるろう(第11図1a・1b)。まず、地山を長さ3.45m・幅2.2mほど、楕円形に浅く掘削し、その中央を相似形(長さ2.85m、幅1.75m)にさらに掘削して二段墓壇とし、棺内底面となる部分をわずかに掘り残している。一段目の浅い掘削面は側石上面、蓋石の設置レベルに対応するとみてよい。二段目の墓壇は蓋石よりもさらに大きく、その肩部に蓋石を架構する目的で掘削されてはいない。むしろ、石棺周囲にある程度の空間を故意に設けている。墓壇底の掘削の際、小口石は個別に設置する棺石材の高さに合わせて掘削底面高を調整したようである。両長側石掘削は棺石材の高さに関係なく、ほぼ同じ掘削底面高となる。小口石を設置した後に長側石を据え置いていったのであろう。その際、中央に掘り残した地山部分に板石材を載せるか、石材内面を押し当てるようにして長側石を設置していた。蓋石の設置にも関わるが、棺石材内面がわずかに内側に傾斜するように据え立てられていたとみてよい。



第11図 西条盆地の箱形石棺粘土貼り込み状況 (1/40)

(1a: 長者スクモ塚2号古墳ST01横断面土層堆積図、1b: 同墳ST01縦断面土層堆積図、2a: 千人塚古墳1号石棺横断面土層堆積図、2b: 同墳1号石棺縦断面土層堆積図)

この後、橙色の砂質土(第20層)を長側石外面底

部に詰め込み、棺石材の位置を固定し、棺石材下部の間隙を埋めて補強したものとみられる。同じレベルで棺内には灰白色粘土（第29層）を10cmほど貼り込んで棺床面としている。また、この棺床を成形した灰白色粘土と同じ粘土（第19層）を石棺周囲に20～30cmほど厚く貼り込んで覆っていることがわかる（第8図石棺周囲のトーン部分）。上面は石棺外側に傾斜して堆積させていたことから、降雨に対する防水効果を期待したものとみられる。さらにその上に褐色の砂質土層（第18層）を置き、その上面をほぼ水平（標高242.55～242.70m前後）、あるいはわずかに南西側に低く傾斜するように全体を揃えている。さらにその上面、標高242.70m前後にまた灰白色粘土（第23層）を貼り込んでいる。この粘土層（第23層）は下層第18層とほぼ同じ範囲に広がっており、蓋石設置前後には、石棺周囲30～40cm程度、灰白色粘土による貼り込み面が見られたものと思われる。

このように、石棺の周囲を白い粘土で覆う事例は付近の古墳にもみられた。それは広島大学考古学研究室により、2008～2009年度に発掘調査が行われた東広島市高屋町千人塚（仙人塚）古墳第1号石棺である（古瀬編 2010、第1図・第11図2a・2b）。以前に盗掘が行われたものの、石棺石材や周囲の墓壇の破壊は限定的であったとみられる。遺構の現状を確認するための調査であり、全面的な発掘を行ったわけではなかったが、白色粘土を多用した石棺設置状況が明らかとなっている。調査範囲には墓壇掘形が確認できなかったため、おそらくは墳丘構築と併行して石棺周囲の盛土を施していたと想定されている（古瀬編 2010、11頁）。その後、石棺石材の最下面に砂質土（第11図2a・b、第20～22層）を敷いた後に石棺粘土床（第19層）とほぼ同じ高さから石棺周囲に白色粘土（第3・9層）を貼り込み、2～3層砂質土層を堆積させた後に再度白色粘土（第3・4・10層）を貼り込み、その上面に鮮やかな赤色顔料を塗布していた。石棺の周囲、石棺石材の上面に合わせて白色粘土を敷き詰めていたことから、視覚的な効果を狙っていたものとされる（古瀬編 2010、11頁）。なお、蓋石は大小2石の平石から成り、長者スクモ塚第2号古墳箱形石棺ST01よりも大きな石材を使用していた（第12図3）。

墓壇の有無には関わらず、長者スクモ塚第2号墳箱形石棺ST01と千人塚古墳第1号石棺には、箱形石棺の周囲に2度以上、粘土を貼り込める、あるいは敷き詰めるといった共通点がある。外側に傾斜して堆積させている状況も観察できたことから、防水機能を強化するといった理由もあるだろうが、蓋石設置直前に石棺周囲に広く白色（あるいは一部赤色）の空間を作り出していた当時の視覚的な状況は、埋葬の最終段階における荘厳化を目論んだ可能性があること、またそれが西条盆地周辺の古墳時代前半期の箱形石棺を埋置する主要古墳にはおそらく通有なものであった可能性を指摘しておきたい<sup>(17)</sup>。

## （2）西条盆地における箱形石棺による埋葬儀礼の変化

広島県東広島市に含まれる西条盆地では、それほど多くの前半期古墳がみられるわけではないものの、古墳時代前期後葉以降とされる埋葬施設はほぼすべて箱形石棺であった。なかでも広島大学考古学研究室が行った千人塚古墳の発掘調査は、埋葬施設の発展に関わる重要な視座を提供したといえる。千人塚古墳第2号箱形石棺は盗掘されてはいたものの、石棺を

構成する石材と墓壇掘形が遺存していた（第12図1）。これをみると、幅20～30cm、長さ1.6mと細長いものだが、小型の石材を並べて箱形石棺としていた。二段墓壇を掘削し、小口石を設置した後に二段目掘形にあわせて5～6石を長側石として設置する。蓋石は一段目の掘形に架構する場合もある。弥生時代にみられる石蓋土坑墓や一部の箱形石棺墓と同様である。第2節で述べたように、弥生時代後期からの系譜を引くものであり、広島県（安芸地方）では通常の形態を示している（第13図上）。二段目掘形の平面形は石材の配置範囲とほぼ同形であり、石棺周囲を埋土・粘土で充填する間隙はほとんどない。石材が小さいことから、当然多くの石材が必要となり、石棺上面が不揃いになる。また、そのために蓋石の設置が不安定になることから、蓋石の荷重を二段目の墓壇にあずけることで安定した構造を保つ場合もしばしばみられるわけである。

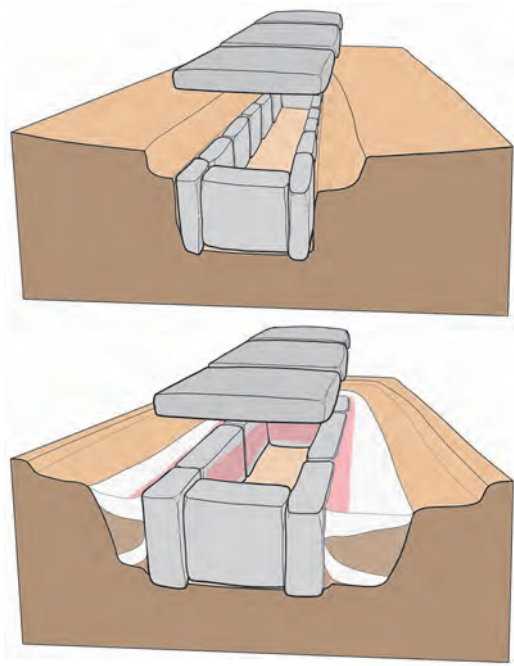
しかし、長者スクモ塚第2号古墳の箱形石棺ST01は二段墓壇を踏襲したものの、上記のような蓋石の設置をしなかった。先述したように地山掘削ではあったが、二段目の墓壇も石棺の周囲を30～50cmほど掘り込み、粘土の充填を行っていた（第12図2、第13図下）。一段目の掘形に蓋石を架構せず、棺を構成する長側石と小口石に蓋石の荷重をかけるため、石棺石材の上面が揃っており、かつ棺石材の個数が少なくなるといった特徴がみられる。また、箱形石棺の周囲を白色系の粘土で覆い、視覚的にはより大きな埋葬施設を作り出したかのような効果を目論んでいたといってもよい。

この点についてはさらに千人塚古墳第1号箱形石棺にその発展的形態を見て取ることがで



第12図 西条盆地における石棺比較

(1. 千人塚古墳第2号石棺 2. 長者スクモ塚第2号墳石棺ST01 3. 千人塚古墳第1号石棺)



第13図 箱形石棺の設置方法の違い

きる。先述したように千人塚古墳第1号箱形石棺は、いわゆる構築墓壙となる。石棺周囲により多くの白色粘土の充填を行っており、その範囲はさらに広がっていた。また、白色粘土上面には朱による赤彩がみられ、遺骸の埋葬にとまなう儀礼的な措置が棺内だけでなく、その周辺の敷き粘土上面でも繰り広げられた可能性を示唆してくれている。箱形石棺を構成する石材数もさらに少なくなり、より整った直方体の石材を使用していたことから、石材上面もより揃えられ、巨大な平石を蓋石として使用することが可能になったとみてよい。

これらのことからすれば、西条盆地における主要古墳の箱形石棺は弥生時代のそれとは異なり、埋葬儀礼の複雑化や荘厳化を示唆するものといえる。墓壙の大型化、石棺石材の大型化など

とも相まって、箱形石棺自体の形態が変容し、その設置から周辺作業、埋葬、蓋石設置までに関わる様々な行為が埋葬儀礼と結びついていたとみたい。

以上のことから敷衍すれば、長者スクモ塚第2号古墳石棺ST01は千人塚古墳第1号箱形石棺に先行して出現した可能性が高くなり、古墳時代前期後半、おそらくは4世紀後葉を前後する時期に造営されたとみることができよう。

また、東広島市西条盆地に築造された安芸地方最大の前方後円墳、三ッ城第1号古墳の埋葬施設も同様に箱形石棺による埋葬儀礼の延長線上にあったといつてよい（石井・三枝編2004）。三ッ城第1号古墳は全長92mになる古墳時代中期前半、5世紀前葉頃の前方後円墳である。後円部には3基の埋葬施設がある。いずれも二段墓壙に箱形石棺を中心とした埋葬施設を設置していた。先述したように、第1・2号埋葬施設は箱形石棺の周囲に石槨があり、それぞれに蓋石・天井石が架構されていた。

第1号埋葬施設の中心は底石をもつ小規模な箱形石棺である。石棺周囲は割板材で構成された石槨と割石材によって覆われていた（第14図）。小口のみ板石材を立てるが、その他は割石材で囲い、3～5段に積み上げた後に天井石を架構する。さらにその周囲の割石は控え積みのようにもみえるが石棺・石槨ともに筐体が非常に低く、その壁体に控え積みが必要とはみえない。石棺・石槨を中心に周囲の墓壙面を割石で覆うことが重視されていたようにも思える。小規模な竪穴石室や石棺系小石室の周囲に控え積みのような石敷き面を作り出す事例としては、岡山県兵庫県養久山1号墳第2主体部（近藤編1985）、兵庫県梅田15号墳SX01（仁尾・菱田・大前編2003）、兵庫県方谷5号墳第2主体部（小川編2008）などがある。それら中国地方山間部の小規模墳墓群の系譜を引く可能性もあろう<sup>(18)</sup>。しかし、荘厳化した

ともみえる施設を作り上げ、埋葬儀礼において視覚的効果を高めている点では、三ッ城第1号古墳の埋葬施設は西条盆地における一連の箱形石棺による埋葬儀礼の発展的形態とみてよからう。

第2号埋葬施設は箱形石棺の周りを同様の板石材で覆い、天井石を設置しており、「箱形石槨」ともいえる特異な埋葬施設を作り出している。石棺の周囲には埋土が充填される途中で外側の石槨を構成する板石材を設置し、その周囲に再度裏込め土を充填する。その際に、粘土ではなく大型の栗石を詰め込んでいる状況が断面図から確認できる（石井・三枝編2004、第41図）。第1号埋葬施設を簡略



第14図 三ッ城第1号古墳第1埋葬施設  
(東広島市教育委員会提供)

化して模倣したようにみえる。またそれだけでなく、長者スクモ塚第2号古墳や千人塚古墳でみた石棺周囲の白色粘土貼り込みや敷き粘土の代わりに、石棺・石槨の周囲に石敷き面を作り出すことに努めていたとも考えることができる。

3号埋葬施設は箱形石棺のみで、石槨構造はもたない。石棺周囲の一段目の墓壇底面部分は鉄鉢や鉄鏃を副葬するスペースとして利用されていた状況が明らかとなっている（石井・三枝編2004）。よって、三ッ城第1号古墳で行われた埋葬には、冒頭で述べたような簡略な石棺系の小竪穴式石室の構築を行ってきた経験が前提としてあり、中国地方山間部からの影響があったにせよ、長者スクモ塚第2号古墳や千人塚古墳などでみられた箱形石棺による埋葬手順が媒介となって実現したと想像することが可能であろう。長者スクモ塚第2号古墳から千人塚古墳、三ッ城第1号古墳の埋葬施設は当該地域の箱形石棺への強い志向性を示す埋葬儀礼の発展の道程であったといえる<sup>(19)</sup>。

### (3) 箱形石棺を中心的な埋葬施設とする社会

これまで述べてきたように、西条盆地周辺では古墳時代前期後葉以降、古墳の埋葬施設として箱形石棺が主流となった。このように箱形石棺を中心的な埋葬施設とする前方後円墳や円墳は、広島県だけでなく大分県周辺でもよくみられる。響灘を中心として弥生時代に箱形石棺が普及していた地域では、古墳時代になっても、箱形石棺を中心的な埋葬施設とする前方後円墳を築造する場合がある。板状の石材を豊富に入手できる自然環境にも左右される場合があるものの、連綿と引き続く埋葬施設に固執する傾向がみられる。

西条盆地の箱形石棺を埋葬施設とする古墳では、副葬される青銅鏡は面径の小さな沓形倭鏡しかみられない（第1表）。しかしその一方で、西条盆地の西方、広島市中心部の太田川下流域の前期古墳の多くは通有の竪穴式石室を埋葬施設としており、西条盆地とは明らかに

第1表 広島市太田川下流域の前期古墳と東広島市西条盆地周辺の前半期古墳

古墳名	所在地	墳丘形態	墳丘規模(m)	埋葬施設形態	出土鏡類	面径(cm) [復元値]	集成 編年	文 献
宇那木山第2号古墳	広島市	前方後円	40	竪穴式石室	画文帯神獸鏡 珠文鏡	10.7 10.2	1期	古瀬2006
神宮山第1号古墳	広島市	前方後円	28	竪穴式石室	舶載内行花文鏡片	[11.0]	2期	小清水ほか1986
中小田第1号古墳	広島市	前方後円	28	竪穴式石室	三角縁吾作銘神獸鏡 斜縁上方作銘獸帯鏡	20.1 13.1	2期	潮見編1982
千人塚古墳	東広島市	円	24	箱形石棺	珠文鏡	7.2	4期	古瀬編2010
三ッ城第1号古墳	東広島市	前方後円	92	箱形石棺	珠文鏡	6.8	6期	石井・三枝編2004
夫婦茶屋古墳	東広島市	円	-	箱形石棺	獸形鏡	12.2	-	古瀬2006

異なる。小さいながらも竪穴式石室が普及する太田川下流域では、宇那木山第2号古墳の画文帯神獸鏡（広島大学大学院文学研究科考古学研究室 2002、古瀬 2006）や、神宮山第1号古墳出土の内行花文鏡片（小清水ほか1986）、中小田第1号古墳の三角縁四神四獸鏡（潮見編 1980）などといった舶載鏡が認められる。きわめて対照的な事象であった。（野島）

## 7. おわりに

長者スクモ塚古墳第2号墳では、長年箱形石棺が露出していた。この箱形石棺ST01については冒頭で述べてきたように、これまで第3号古墳との混同がみられた。そのため、発掘調査を通して確かな情報の収集を行うとともに、箱形石棺を埋葬施設とする西条盆地周辺の古墳時代の首長墓系列の再構築を目指した。結果として、西条盆地周辺では箱形石棺を埋葬施設とする強い志向性・地域性を再認識した。また、それらを前提とし、箱形石棺を中心埋葬施設としつつ、さらに地域性の高い新たな埋葬儀礼を生み出していった過程を追うことができた。これまで三ッ城第1号古墳の被葬者に関しては、後の安芸国造に結び付く「安芸地方全体を統率・管轄する大首長」といったイメージが先行していたが、埋葬施設からみれば、西条盆地周辺に根差した埋葬手段をより発展的な埋葬儀礼へと昇華させていたことから、地域社会独自の政治的紐帯を見出すこともできるのではなかろうか。

今回の報告は2016～2019年度の野外考古学実習授業における遺構確認、土層断面観察・実測、写真撮影をもとにした。長者スクモ塚古墳群における調査研究は継続中ではあるが、これをもって第2号古墳の発掘調査に関する研究報告としたい。長者スクモ塚古墳第2号古墳の発掘調査を実施するにあたっては、東広島市出土文化財管理センターの妹尾周三氏・中山学氏にはさまざまなご指導・ご協力をいただいた。また、東広島市教育委員会には、三ッ城第1号古墳第1号埋葬施設の写真（第14図、石井・三枝編2004文献巻頭図版1）掲載の許可をいただいた。ともに記して感謝したい。さらに、測量に関してご教示をいただいた名誉教授の古瀬清秀先生、戦後の古墳周辺の状況などをお教えいただいた土地地権者の一人、松浦勝巳氏、西条共同研修センターの建設に関わる記録資料をお探しいただいた広島大学財務・総務室浦田晋矢氏にも感謝したい。



なお、本研究報告は『古墳時代の首長墓系列に関する地域研究』と題する科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号19K01096〈研究代表者：野島 永〉）による調査研究成果の一部である。第1～4・6・7節は野島、第5節は永野が執筆し、両者協議のうえ野島が全体の文体を調整した。（野島）

## 註

- (1) 広島大学名誉教授古瀬清秀氏から伺った。
- (2) 発掘調査参加者は調査担当の野島永（第2～4次調査）、および竹広文明（第3・4次調査）・有松唯（第4次調査）の他、以下の通りである。

### 第2次調査（2017年度）

広島大学大学院博士課程前期生：佐々木尚也・名村威彦・真木大空

広島大学学部生：永野智朗・下江裕貴・藤澤昌弘・井島大地・南條 花・陳 劍林・宇梶 柊・妻藤祐太・田口隆晟・西岡日向子・橋本安奈・松原 萌・満田 崇

### 第3次調査（2018年度）

広島大学大学院博士課程前期生：下江裕貴・藤澤昌弘

広島大学学部生：永野智朗・井島大地・陳 劍林・宇梶 柊・妻藤祐太・田口隆晟・西岡日向子・橋本安奈・松原 萌・満田 崇・川本理央・中井映見・前川曹一郎・山本洋子

### 第4次調査（2019年度）

広島大学大学院博士課程前期生：山本洋子

広島大学学部生：永野智朗・川本理央・中井映見・前川曹一郎・宇野真太郎・小出来恒平・小西文・佐々木皓亮・竹田千紘

- (3) 西条盆地の石棺系小竪穴式石室の特徴は板石材で構成された箱形石棺の上にさらに割石材をほぼ水平に積み上げ、数段で壁体上部を構築した後に大型の石材で蓋石を架構する事例が多い。中国地方山間部から近畿地方西辺にみられる石棺系小竪穴式石室a類（福永 1992）に類するが、壁体上部、割石を数段積み上げる壁体形成が異なる。石棺系小竪穴式石室については、箱形石棺が割石積みの長大な竪穴式石室の影響を受けて成立したものと理解される（福永 1992）。長大な竪穴式石室が数多く構築された畿内周辺と、弥生時代後期以来、箱形石棺を主要な埋葬施設としてきた安芸地方では、石棺系小竪穴式石室の構築方法にも地域差がみられる。
- (4) 大槇第1号古墳からは、三ツ城第1号古墳出土例に酷似した朝顔形埴輪や円筒埴輪が出土している。埴輪下端が欠損しており、転用された可能性もあろう。三ツ城第1号古墳の造営に深くかかわった人物が被葬者であったと想定される（藤岡 1993）。
- (5) 西条町の狐が城古墳や古市古墳（植田編 1983）、あるいは宗近柳国第1号古墳（松村・吉本 1973）では、古墳時代後期、6世紀後半期の小規模な竪穴式石室もある。狐が城古墳など、石材の組み方が横穴式石室のそれに類しており（植田編 1983、84頁・石井編 2000、17頁）、箱形石棺や竪穴系小石棺などとともに存続したようである。
- (6) 長者スクモ塚第3号古墳から出土した獣形鏡・刀子・管玉などの副葬品はいったん、東京国立博物館に保管されたものの、散逸したようである（松崎・木下 1954、註）。また第2号古墳から仿製鏡等が出土したといった情報もある。
- (7) 東広島市出土文化財管理センター（東広島市教育委員会）との協議の結果、煩雑さを避けるため、同一年度内の発掘調査（野外考古学実習A・B、およびC）を一調査単位として、次数を付した。
- (8) 第2次調査では、第2号古墳円丘部（調査時は後円部と呼称）墳頂中央に設置された杭（p.19）の中

心とし、南4m四方のグリッド範囲をa調査区、北4m四方のグリッド範囲をb調査区と呼称したが、のちに調査区が増えたため、南北8と9の間のグリッド・ラインから南半の墳頂平坦部をa調査区、北半の墳頂平坦部をb調査区とし、調査区ごとに枝番号を付加することに変更した。

- (9) 第2次調査においてa-9調査区は蓋石の東側に設定したが、はからずも木棺直葬墓ST02の墓壇掘形を検出したため、第3次調査では木棺直葬墓ST02の主軸に沿って再度a-10調査区を設定した。箱形石棺ST01の蓋石と想定された板石を移動させた後に、a-10調査区の東端に接してa-11調査区を設定して掘削し、ST01西側墓壇掘形の土層堆積状況を再度確認することとなった。a-9調査区と、それを再掘削して壁面を新たにしたa-10調査区、いずれの調査区北壁の土層観察でもST02墓壇掘形がST01の墓壇掘形を破壊していた状況を確認した。
- (10) a-2・a-3調査区は木があったために、便宜上2つの調査区に分けた。第2次調査当初、このL字形調査区をa調査区①区とした。a調査区①区内を区別する場合は、それぞれa-1調査区を「a調査区①区北西側」、a-2・a-3調査区を「a調査区①区北東側」としていたが、註(8)にもあるように、のちに墳頂平坦部南半をa調査区とし、調査区ごとに枝番号を付加した。
- (11) ほぼ垂直に遺存していた板石の北側表面に赤色顔料を確認することができた。そのため、北側が棺内、南側が棺外と想定して調査区を設定した。
- (12) a調査区同様、第2次調査当初、このL字形調査区をb調査区①区とした。b調査区①区内を区別する場合は、それぞれb-1調査区を「b調査区①区南西側」、b-2調査区を「b調査区①区南東側」としていたが、のちに墳頂平坦部北半をb調査区とし、調査区ごとに枝番号を付加した。
- (13) 東広島市の千人塚古墳でも、昭和期に大規模な掘削・削平と埋戻しが行われていた（古瀬編 2010）。
- (14) 攪乱抗の埋土を除去した際に、埋土を5mmメッシュの篩にかけたが、副葬品などの遺物は検出できなかった。
- (15) 検出当初は埋葬施設と想定して「ST03」と呼称していたが、盗掘坑の可能性が高いことから、「SK03」と表記を変更した。
- (16) 第2号古墳墳丘南西側で埴輪片（本誌「東広島市長者スクモ塚第1号古墳調査報告（第5次調査）第7図10」）を採集したが、第1号古墳から転落したものと考えられる。
- (17) 西条町下三永にある夫婦茶屋古墳では、石棺の周囲に厚さ9cmの粘土が貼り込まれていたらしい（松崎 1979c）。残念ながら、広島県内における過去の箱形石棺の発掘調査では、石棺内部を掘削し、出土遺物を確認することはあっても、その周囲の墓壇掘形を検出し、掘形内部の堆積土層の確認を行った事例はほとんどなく、詳細が不明な古墳も少なくない。
- (18) 小規模な竪穴式石室や石棺系石室（石棺系小竪穴式石室b, c, d類（福永 1992））の周囲に機能性のない、控え積み状の割石材を充填させた事例（岡山県横見9号墳第3主体部（下澤・友成 1977）・兵庫県柿坪中山2号墳第1主体部（櫃本・加古編 1978）など）がさらに形骸化し、板石材を立てる箱形石棺（石棺系石室a類（福永 1992））の周囲に石材を充填させたものが後出するものとみられる。石棺・石槨の構造をもつ点で異なるが、三ッ城第1号古墳第1号埋葬施設は前者に、第2号埋葬施設は後者に類似する。
- (19) 箱形石棺の周囲に粘土を貼り込むか、石棺石槨の周囲に割石や栗石を充填するかという違いがある。視覚的には、粘土槨と控え積み石材を充填した竪穴式石槨に見立てた差異であった可能性も想定できよう。

## 引用・参考文献

- 青山 透・小都 隆・伊藤 実 1983 『酒屋高塚古墳』広島県教育委員会。
- 青山 透・沢元史代編 1990 『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ（本文編）、広島県埋蔵文化財調査報告書第83集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 池田次郎 1954 「三ツ城古墳出土人骨、並びに広島縣下出土の古墳人骨について」『三ツ城古墳』広島縣教育委員会、48～51頁。
- 池西美咲ほか 2016 「庄原市新庄町新庄龍王1号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第8号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、47～56頁。
- 石井隆博 1992 「助平古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』（1）、東広島市教育委員会、81～97頁。
- 石井隆博編 2000 『森信第10号古墳発掘調査報告書』東広島市教育委員会文化財報告第15集、東広島市教育委員会。
- 石井隆博・三枝健二編 2004 『史跡三ツ城古墳発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第42冊、東広島市教育文化振興事業団。
- 出野上 靖 2003 『原の谷古墳・原の谷遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第37冊、東広島市教育文化振興事業団。
- 植田千佳穂編 1983 『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅰ）、広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、85～92頁。
- 植田 広編 2008 『高屋東2号・3号遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第60冊、東広島市教育文化振興事業団。
- 上田直弥 2015 「粘土槨の展開過程とその画期 ―畿内の事例を中心に―」『考古学研究』第62巻第3号、85～105頁。
- 恵谷泰典 2005 『蛇迫第1～4号古墳・蛇迫遺跡発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団。
- 大上裕士 1993 「才が迫遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅸ、広島県埋蔵文化財調査センター、19～44頁。
- 小川弦太編 2008 『方谷古墳群』一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路2）建設に伴う発掘調査報告書、兵庫県文化財調査報告330冊、兵庫県教育委員会。
- 沖田健太郎編 2009 『郷1号遺跡発掘調査報告』文化財センター調査報告書第67冊、東広島市教育文化振興事業団。
- 河瀬正利 1971 「藤が迫遺跡群 第1号古墳」『広島県文化財調査報告』第9集、広島県教育委員会・広島県文化財協会、61～85頁。
- 河瀬正利編 1975 『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』広島県教育委員会。
- 小清水圭子・須藤敦子・妹尾有規子・中摩浩太郎 1986 「神宮山第1号古墳・3号古墳の測量調査成果報告」『続トレンチ』第6巻第4号、広島大学文学部考古学研究室・続トレンチ編集委員会。
- 是光吉基 1972 「豊ヶ崎古墳」『賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報』広島県文化財協会、11～13頁。
- 近藤義郎編 1985 『養久山墳墓群』揖保川町教育委員会。
- 潮見 浩編 1982 『中小田古墳群』広島市の文化財第16集、広島市教育委員会。
- 下江裕貴・永野智朗・藤澤昌弘 2018 「東広島市長者スクモ塚第1号古墳測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第10号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、41～70頁。
- 下澤公明・友成誠司 1977 「横見墳墓群」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』9、岡山県教育委員会、1～342頁。
- 鈴木 誠・池田次郎 1950 「広島縣下箱式石棺出土の人骨に就て」『人類学輯報』第4輯、広島医科大学解

- 剖學教室、1～8頁。
- 豊 元国編 1954 「広島懸古墳総攬」『三ッ城古墳』広島懸教育委員会、65～171頁。
- 永野智朗 2018 「東広島市長者スクモ塚第2号古墳測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第10号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、71～86頁。
- 仁尾一人・菱田淳子・大前篤子編 2003 『梅田古墳群』Ⅱ、播但連絡道路(5期)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ、兵庫県文化財調査報告第257冊、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所。
- 葉杖哲也・三保光成ほか 1994 『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅳ、広島県埋蔵文化財調査報告書第128集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 平尾英希ほか 2015 「三次市吉舎町海田原29号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第7号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、93～108頁。
- 広島大学大学院文学研究科考古学研究室 2002 『宇那木山第2号古墳発掘調査報告会資料』。
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国四国編、山川出版社、24～26頁。
- 櫃本誠一・加古千恵子編 1978 『柿坪中山古墳群』但馬における集団墓の調査、山東町教育委員会。
- 福永伸哉 1992 「近畿地方の小竪穴式石室」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2冊、大阪大学南原古墳調査団、129～160頁。
- 藤岡孝司 1993 「大槓第1号古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ、東広島市教育委員会、78～90頁。
- 藤野次史 2015 「東広島市丸山神社古墳群の測量調査」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第6号、広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門、97～134頁。
- 古瀬清秀 1991 「安芸 近藤義郎編『前方後円墳集成』中国四国編、山川出版社、92～94頁。
- 古瀬清秀 2006 「安芸 備後における前期古墳の様相」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会、371～400頁。
- 古瀬清秀編 2010 『千人塚古墳』東広島市教育委員会・広島大学文学研究科考古学研究室。
- 松崎寿和 1979a 「白鳥古墳」『広島県史』考古編、広島県、424頁。
- 松崎寿和 1979b 「千人塚古墳」『広島県史』考古編、広島県、435・807・808頁。
- 松崎寿和 1979c 「夫婦茶屋古墳」『広島県史』考古編、広島県、435・436・807頁。
- 松崎寿和 1979d 「スクモ塚古墳群」『広島県史』考古編、広島県、436頁。
- 松崎寿和・木下 忠 1954 『三ッ城古墳』広島縣教育委員会。
- 松村昌彦 1979 「スクモ塚1号古墳」『広島県の主要古墳』芸備友の会、38～39頁。
- 松村昌彦・吉本裕子 1971 「宗近柳国古墳」河瀬正利編『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』広島県教育委員会、180～197頁。
- 道上康仁・山田繁樹 1985 「大槓3号遺跡」『大槓遺跡群』広島県埋蔵文化財調査報告書第38集、広島県埋蔵文化財調査センター、34～95頁。
- 村田 晋 2018 「広島県」『中期古墳の現状と課題』Ⅱ、中国四国前方後円墳研究会、45～52頁。
- 村田 晋・赤木智香・上利碧月・川添敦史・戸川貴大・中田南美・林 美和・三輪剛史・山本晃弘 2014 「三次市吉舎町海田原20号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第6号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、103～115頁。
- 山田繁樹・佐々木直彦ほか 1993 『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅱ（本文編）、広島県埋蔵文化財調査報告書第97集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 脇坂光彦 2014 「広島県南西部の古墳と阿岐国」『広島県の考古学と文化財保護』松下正司先生喜寿記念論集、「広島県の考古学と文化財保護」刊行会、209～216頁。

第2表 長者スクモ塚第2号古墳土層観察表

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	なし	なし	枯葉などの腐食層。	表土
第2層	褐色土	10YR4/6	弱	弱	表土による浸食を受ける。	自然堆積土
第3層	黄褐色土	10YR5/6	強	やや弱	シルトがベース、3mmのクサリ礫を1%含む。	盛土
第4層	明褐色土	7.5YR5/8	弱	やや弱	砂質土がベース、3~4mmのクサリ礫を7%含む。	流失が著しい部分的な盛土
第5層	褐色土	10YR4/6	弱	強	砂質土がベース、10mm以下のクサリ礫を40%含む。	盛土
第6層	明褐色土	7.5YR5/6	やや弱	やや弱	砂質土がベース、5mm以下のクサリ礫を7%含む。	盛土
第7層	明褐色土	7.5YR5/6	弱	やや強	砂質土がベース、10mm以下のクサリ礫を30%含む。	盛土
第8層	褐色土	7.5YR4/6	弱	強	砂質土がベース、3~4mmのクサリ礫を5%含む。	部分的な盛土
第11層	橙色土	7.5YR7/6	弱	強	花崗岩バイラン土。	地山
第12層	褐色土	7.5YR4/6	やや弱	弱	砂質土がベース、7mm以下のクサリ礫を20%含む。灰色の粘土を含む。	ST02充填土
第13層	褐色土	10YR4/6	弱	弱	砂質土がベース、2mm以下のクサリ礫を1%含む。	SK03の埋土上層
第14層	赤褐色土	5YR4/8	やや弱	弱	砂質土がベース、不純物を含まない。	SK03の埋土下層
第15層	橙色土	7.5YR6/6	やや弱	弱	砂質土がベース、3mm以下のクサリ礫を2%含む。	部分的な盛土
第16層	明褐色土	7.5YR5/6	やや弱	弱	砂質土がベース、7mm以下のクサリ礫を10%含む。	盛土か
第17層	明褐色土	7.5YR5/6	弱	弱	砂質土がベース、1~3mmのクサリ礫を7%含む。	ST01裏込め
第18層	褐色土	7.5YR4/6	やや弱	弱	砂質土がベース、1~3mmのクサリ礫を7%含む。	23層上面形成のための埋土
第19層	明緑灰白色粘土	10GY7/1	強	強	粘土がベース、明黄褐色(10YR6/6)の砂質土を含む。23・26・29層と同じ粘土を使用。	ST01裏込め
第20層	橙色土	7.5YR6/8	やや弱	弱	砂質土がベース、1mmのクサリ礫を10%含む。	ST01裏込め
第21層	灰白色	10Y8/1	強	やや強	シルトがベース、明黄褐色(10YR6/6)の砂質土を含む。	ST01裏込め
第22層	褐色土	10YR4/6	やや弱	弱	木の根による攪乱を受ける。	攪乱土
第23層	明緑灰白色粘土	10GY7/1	強	強	粘土がベース、明黄褐色(10YR6/6)の砂質土を含む。19・26・29層と同じ粘土を使用。	ST01上面の粘土面
第25層	黄褐色土	10YR5/6	やや弱	弱	砂質土がベース、5mm以下のクサリ礫を10%含む。	攪乱土
第26層	明緑灰白色粘土	10GY7/1	強	強	粘土がベース、明黄褐色(10YR6/6)の砂質土をわずかに含む。19・23・29層と同じ粘土を使用。	ST02の棺床粘土
第27層	明褐色土	7.5YR5/6	弱	やや弱	砂質土がベース、10mmのクサリ礫を15%含む。灰色(7.5Y6/1)の粘土を少し含む。	ST02充填土
第28層	不明	—	—	—	土色確認の前に掘削したため詳細不明。	ST01内堆積土
第29層	明緑灰白色粘土	10GY7/1	強	強	粘土がベース、明黄褐色(10YR6/6)の砂質土をわずかに含む。19・23・26層と同じ粘土を使用。	ST01棺床土
第30層	明褐色土	7.5YR5/6	弱	やや弱	砂質土がベース、2~3mmのクサリ礫を5%含む。	流土
第31層	褐色土	7.5YR4/6	やや弱	やや弱	砂質土がベース、4~5mmのクサリ礫を3%含む。	流土
第32層	黄褐色土	10YR5/6	弱	やや弱	砂質土がベース、1~2mmのクサリ礫を7%含む。	流土
第34層	褐色土	7.5YR4/4	弱	やや強	砂質土がベース、2~3mmのクサリ礫を15%含む。有機物を少量含む。	盛土
第35層	赤褐色土	5YR4/8	やや強	強	砂質土がベース、2~3mmのクサリ礫を30%含む。	盛土
第36層	褐色土	10YR4/6	弱	弱	砂質土がベース、2mm以下のクサリ礫を2%含む。	盛土
第37層	明褐色土	7.5YR5/8	弱	やや強	砂質土がベース、5mmのクサリ礫を40%含む。	盛土
第38層	明褐色土	7.5YR5/6	弱	弱	砂質土がベース、5mm以下のクサリ礫を15%含む。	盛土
第39層	明褐色土	7.5YR5/6	弱	強	砂質土がベース、2~3mmのクサリ礫を20%含む。	盛土
第40層	明褐色土	7.5YR5/8	弱	強	砂質土がベース、5mmのクサリ礫を10%含む。	盛土
第41層	オリーブ褐色土	2.5YR4/4	やや強	強	砂質土がベース、0.5mm以下の細粒を多く含む。	盛土
第42層	明褐色土	7.5YR5/6	やや強	やや弱	砂質土がベース、5mm以下のクサリ礫を7%含む。	盛土
第43層	明黄褐色土	10YR7/6	弱	強	砂質土と粘土(7.5Y6/1)がベース、5~10mmのクサリ礫を5%含む。	ST02被覆土
第44層	灰黄褐色土	10YR4/2	弱	やや強	砂質土がベース、1mm以下のクサリ礫を5%含む。	旧表土

## Excavation Report Chōja-Sukumozuka Kofun No. 2, Higashi-Hiroshima City, Hiroshima Prefecture (2<sup>nd</sup> ~ 4<sup>th</sup> Campaign)

Hisashi NOJIMA, Tomoro NAGANO

The Chōja-Sukumozuka mounded tomb group (*kofun gun*) is located in Saijō-chō (Saijō Basin), Higashi-Hiroshima City, Hiroshima Prefecture, Japan. It consists of three burial mounds, but one (No. 3) has disappeared. On top of the Chōja-Sukumozuka mounded tomb No. 2, a box-shaped stone coffin (stone cist; *hakogata sekkon*) was exposed, and there was an urgent need to examine this mound. After a measurement campaign, from 2017 to 2019, as part of “Field Practice in Archaeology” for archaeology majors at the Hiroshima University School of Letters, several excavations were conducted with the aim of clarifying the dimensions and burial facilities of the mound. The results of this survey indicated that the Chōja Sukumozuka mounded tomb No. 2 was a round mounded tomb (*enpun*) with a diameter of 17m or less. However, a grave with a direct burial of a wooden coffin (*mokkan jikisō bo*) was found. The construction of the burial facility was carried out after the one for the stone coffin.

The material and dimensions of the box-shaped stone coffin and the method of coating the vicinity of the coffin with white clay were similar to the coffins of the *Senninzuka kofun* in the Saijō Basin. It may be seen as a kind of elaborate burial facility. The famous Mitsujō mounded tomb has a total length of over 90m and is often noted as having a relationship with the Kinai (Yamato) polity being the largest keyhole-shaped mounded tomb in the Aki region. However, a closer look at the burial facilities reveals that it is the result of the development of funeral rituals in the area, ones that comprised elaborated box-shaped stone coffins.

長者スクモ塚第2号古墳

図版第1



a. 長者スクモ塚古墳群遠景（西から）



b. 長者スクモ塚第2号古墳墳頂部調査区掘削状況（南上から）

長者スクモ塚第2号古墳

図版第2



a. 長者スクモ塚第2号古墳墳頂部調査状況（南から）



b. 長者スクモ塚第2号古墳の露出した箱形石棺 ST01（東から）



長者スクモ塚第2号古墳

図版第3



a. 長者スクモ塚第2号古墳 a-1 調査区 ST02 被覆粘質土検出状況（北東から）



b. 長者スクモ塚第2号古墳 b-1 調査区墳丘土層堆積状況（南東から）

長者スクモ塚第2号古墳

図版第4

a. 第2号古墳 a-1  
調査区ST02被覆粘質土  
検出状況（東上から）



b. 第2号古墳 a-2  
調査区盛土堆積状況  
（南から）



c. 第2号古墳 a-3  
調査区土坑SK03検出  
状況（北から）



長者スクモ塚第2号古墳

図版第5



a. 第2号古墳b-2  
調査区土坑SK04  
(東から)



b. 第2号古墳b-2  
調査区東壁土層堆積  
状況(西から)



c. 第2号古墳b-3  
調査区西壁土層堆積  
状況(東から)

長者スクモ塚第2号古墳

図版第6

a. 第2号古墳c調査区北壁土層堆積状況（西側、南から）



b. 第2号古墳c調査区北壁土層堆積状況（中央、南から）



c. 第2号古墳d調査区墳端検出状況（北から）



長者スクモ塚第2号古墳

図版第7



a. 第2号古墳f調査区東壁土層堆積状況  
(南端、西から)



b. 第2号古墳f調査区東壁土層堆積状況  
(中央、西から)



c. 第2号古墳a-14調査区完掘状況  
(南から)

長者スクモ塚第2号古墳

図版第8

a. 第2号古墳墳頂  
箱形石棺ST01掘削  
状況（北から）



b. 第2号古墳墳頂  
箱形石棺ST01掘削  
状況（西から）



c. 第2号古墳 a-5  
調査区箱形石棺ST01  
掘削状況（東から）



長者スクモ塚第2号古墳

図版第9



a. 第2号古墳墳頂  
箱形石棺ST01南小口  
赤色顔料付着状況  
(北から)



b. 第2号古墳 a-7  
調査区箱形石棺ST01  
裏込め粘土検出状況  
(東から)



c. 第2号古墳 a-7  
調査区西壁箱形石棺  
ST01墓壙検出状況  
(東から)

長者スクモ塚第2号古墳

図版第10

a. 第2号古墳 a-8  
調査区北壁箱形石棺  
ST01墓壙検出状況  
（南から）



b. 第2号古墳 a-11  
調査区箱形石棺ST01  
裏込め粘土検出状況  
（南から）



c. 第2号古墳 a-10.  
a-11調査区埋葬施設  
ST01・ST02掘形検出  
状況（南から）





長者スクモ塚第2号古墳

図版第11



a. 第2号古墳 a-12  
調査区木棺直葬墓ST02  
掘形平面検出状況  
(東から)



b. 第2号古墳 a-13  
調査区木棺直葬墓ST02  
掘形平面検出状況  
(東から)



c. 第2号古墳 a-13  
調査区木棺直葬墓ST02  
掘形断面検出状況  
(南から)

長者スクモ塚第2号古墳

図版第12

a. 第2号古墳墳頂  
木棺直葬墓ST02南側  
攪乱坑完掘状況  
（南東から）



b. 第2号古墳墳頂  
木棺直葬墓ST02検出  
状況（南から）



c. 長者スクモ塚  
第2号古墳出土遺物

